

3. 保健業務支援

Contents

派遣報告書

健康福祉部 中島 佐和子 (任務：保健業務支援)

健康福祉部 糸川 真実 (任務：保健業務支援)

職員手記

健康福祉部 糸川 真実 (任務：保健業務支援)

現地からの職員レポート

健康福祉部 糸川 真実 (任務：保健業務支援)

派遣報告書

総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援)

職員手記

総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援)

現地からの職員レポート

総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援)

派遣報告書

健康福祉部 西村 智美 (任務：保健業務支援)

職員レポート

健康福祉部 西村 智美 (任務：保健業務支援)

| |
|--------------------------|
| 派遣報告書 |
| 健康福祉部 中島 佐和子 (任務：保健業務支援) |

派遣先：岩手県山田町

派遣期間：平成 23 年 5 月 29 日～平成 23 年 6 月 2 日

【大阪府による保健師派遣】

震災当初より、大阪府庁・府下保健所保健師が被災地に派遣され、避難所の衛生管理や避難者の健康管理、心のケアを実施してきた。Aチームが織笠地区、Bチームが豊間根地区を担当し、避難所への支援に加え、徐々に地区の全戸訪問を実施していたが、一時的な被災地支援から長期的な保健福祉活動の機能再建に役割がシフトチェンジされることを見越し、23班を最後に2チーム派遣を終了することになっていた。6月中は1チームの7日間派遣、7月以降は全国市長会と調整し中期派遣体制になる予定である。

【事前説明】

5月23日(月)大阪府庁において事前説明があった。参加者は22班23班のA・Bチーム計8名の保健師が集まり、保健師派遣についての注意事項等を知りたいが、大阪府からは1チーム体制に以降するための準備をしてほしいという要請があった。

【地区概況】

宮古市下閉伊郡山田町は山田湾の沿岸の町で、今回の震災では海からの津波と織笠川の氾濫、津波後の火災での被害を受けている。活動拠点となった山田町役場は海を望む坂の上に建ち、隣接して保健センター、社会福祉協議会の建物が残っていた。(写真1)担当した織笠地域は山田町役場から車で15分ほどの「津波」「氾濫」「火災」の被害を受け、また小学校、中学校、県立高等学校、保育所が高台にあり、すべてが避難所となっていた。(写真2)大阪府Bチームの豊間根地区は同じ山田町でも山手にあり、津波被害がなく、避難所には他地区で被災された方や自宅では不安で過ごせない方が集まっており、状況が異なっていた。

【被災地での保健師活動 被災地行政との連携】

山田町は宮古保健所管内の町である。

宮古保健所：月～金、午前8時30分～9時 管内で支援する都道府県の支援グループリーダーによるミーティング（心のケアチーム・保健師グループ）。保健所保健師が司会進行。活動拠点及び連絡の取れる携帯電話番号、リーダー・メンバーの確認と情報提供。

山田町役場：毎朝、午前9時50分頃から 地区担当保健師と当日の活動内容の確認。

月・水・金 午後4時～ 山田町内の支援グループリーダーによるミーティング（心のケアチーム・保健師グループ）。山田町役場保健師が司会進行。活動内容の報告と新たに発生している全体的な課題などを町保健師に伝える。

その後、検討すべき課題があれば各自、地区担当保健師と話し合う。

緊急時においては宮古保健所でのミーティングのように、外部支援の把握と相互連携のしくみが必要。また地域での具体的な地区診断から発生する課題については町でのミーティングが有効で、ミーティングでの課題について町保健師が町内関係機関と連携するきっかけともなっていた。

【被災地での保健師活動 日々の活動】

1. 初日（5月29日 日曜）

台風とともに北上、ペアとなる保健師とは盛岡のバス乗り場で待ち合わせし、バスの中で自己紹介や説明会を聞いての所見などを話し合う。

18時ホテル着 20時からAチームの前任より引継ぎ。避難所の様子、全戸訪問の状況、要フォロー者の状況などを聞く。宮古保健所や山田町との連携などを聞き終わったのは、22時30分。その後、我々2人で翌日の行動計画を立て、23時30分終了。

2. 活動日1（5月30日 月曜）

宮古地域に大雨洪水暴風警報 波浪注意報

宮古保健所、山田町役場でのミーティング等の後、避難所と在宅生活者の個別カルテの確認。前任者の引継ぎでもれているケースがないかを把握したうえで、活動期間中の要訪問事例を抽出。

午後から大雨の中、全戸訪問の未把握分と在宅酸素療法中のかたや妊婦など継続支援が必要だが2度目の訪問ができていないかたなどを尋ねる。津波で仕事も自宅も無くしたかたが、避難所で眠れず、空き家を借り、また服薬の効果もあり、震災後1ヶ月でやっとゆっくり眠れるようになったという声や、障害

のある孫が地元の支援学校が被災したために遠方に引っ越し、さみしさから酒量が増えてきているという家族の相談を聞いた。いずれもこころのケアチームにつなげるほどではなかったが、被災者の様々な疲れや喪失感を知ることとなった。

3. 活動日2（5月31日 火曜）

午前中は、先日、冠水のため訪問できなかつた地域を回る。（写真3・4）未把握世帯が地図上多く残っていたが、実際は津波で1階部分が抜け、居住できない一帯であることがわかった。その中にも、畳をあげ、アルミサッシの玄関枠を外して洗っているお宅等があり、住み慣れた自宅に再び戻る準備をしている姿があった。

午後からは大阪府心のケアチームとの同行訪問。全戸訪問中に妻から「夫が津波に遭い、命からがら生還したが、それ以降自宅で眠れず荒れている」と相談があり、心のケアチームと保健師が後日訪問し、服薬を開始しているという経過のあるかたであった。2度目訪問となる31日は、服薬の効果で眠れるようになり、気持ちも安定してきたと本人から話を聞く。訪問の前半は医師や看護師とともに本人の話を聞き、後半は保健師のみ別室に移動して妻の気持ちを聞いた。妻自身も夫や子どもが津波以降精神的に不安定で、どう支えるべきかを試行錯誤していた。

その後、隔日に実施する避難所巡回相談。トイレの衛生状態や風呂、居室の清掃状況などの点検や健康管理を実施。町からの連絡事項なども管理者に届ける。織笠小学校講堂には夜間は85人のかたが生活されているが、日中は20人程度。年齢層は30代から70代の男女。睡眠障害と高血圧症で医療チームや再開した地元開業医から処方を受けている方がほとんどであった。講堂を段ボールで6つに仕切り、6つの班で生活していた。一班は14人程度。一つのコミュニティになっていた。織笠保育所は夜間20人程度の入所者がいるが日中は高齢者4～5人程度が残り、ほとんどが不在である。保育所の3室を使用しているが、部屋の中でのしきりはなかった。この時まで、仮設の入居者の当選が個人に知らされてはいるが入居は6月半ばと聞いていたが、管理者や入所者から明日6月1日から入居が始まるという話を聞いた。保健師が巡回すると血圧手帳を出し、今日の体調を話してくれたり、避難所内で咳き込んでいる人がいるなどの情報提供がある。この日は、地区担当保健師が休みで、山田町役場のミーティングもないことから仮設入居に関する情報提供はなかった。

4. 活動日3（6月1日 水曜）

前任者から引き継いだ全戸訪問も織笠地区全体で残り9件ほどとなり、町からもらっていた地図も訪問終了の印だらけとなっていたため、残り9件と点にする要フォロー者が浮き出すようなマップ作りとリスト作りを行った。住民でない我々にとって織笠の住所表示は本当にわかりづらい。第12番地割32-10といった表記がされるが、地割の範囲も飛び地があったり、32の次の数字が続かないなど目当ての家を探すことが地図上でも難しい。そこで勝手に「希望ヶ丘団地」「高校前」等地図上に地名をつけ、地区ごとに訪問者数をまとめた。午前中、そのリスト作りなどの作業をし、残り時間は全戸訪問に出る計画であったが、前日からA・Bそれぞれのパソコンの調子が悪く、午前中かかって作成した表が印刷も登録もできなかつたため、午後から再度の作業となってしまった。この作業により、Aチームは、要フォロー者の緊急度合に合わせた介入時期や全戸訪問の未把握住居などが整理された。

夕方の山田町役場保健師とのミーティングでは、やはり仮設入所についての話となった。山田町の仮設入居の特徴としては、一つの避難所からまとめて仮設に入居するのではなく、町内の避難所から当選者が入居するというものである。6月1日時点では、山田町内に6つの仮設住宅が完成していたが、いずれも織笠地区からは少し離れている。織笠地区内では避難所のある織笠小学校内に仮設住宅を建設中であるが（写真5）、ここも小学校に避難している方が優先的に入所避難所の健康管理を仮設住宅で継続させたいという意志はあるが、6月6日まで準備を待ってしいとのことであった。その後、地区担当保健師に本日作成したリストと全戸訪問の残り件数を報告する。Aチームでは仮設住宅入居先がわかれば、個人別の健康相談記録を仮設住宅ごとの世帯票に添付でき、継続支援が可能であることを報告する。

この日は18時にホテルに戻ると、次のチームが大阪から到着。22時30分まで、仮設住宅の最新の情報も含め、保健師活動の引継ぎを実施した。

（医療・保健・福祉）

- ・医療課題：医療機関が浸水したため、一時的に地元の医療機関の機能がストップした。

内科・精神科…他府県からの医療チームやこころのケアチームが震災直後から動き、5月末には開業医も診療再開しており、医療チームの撤退が

徐々に始まっていた。

整形外科…関節疾患の手術の延期や手術後のリハビリができない事例があった。

避難所では、寒さ予防のために毛布を床に敷き詰めている所も多く、バランスを崩すという理由で椅子生活ができなかった。

歯科…6月に入り、開業医が診療を再開。震災後3ヶ月が経ち、そろそろニーズが出てきた頃であった。

- ・福祉課題：介護…ケアマネジャーが震災数日後から動き始めていた。

停電のため、褥創マットが止まり、床ずれをつくった事例もあった。

5月末の時点で訪問入浴サービスやホームヘルプサービスは提供されていたが、ホームヘルパーは人材不足のためボランティアセンターが調整していたようである。

障害福祉…義足を津波に流されてしまったかたがおられたが、義肢等の業者が機能しておらず、6月末に巡回相談があると聞き、待たれていた。

- ・保健：山田町や宮古市では母子健康手帳の交付や母子健診などは通常通り実施されていた。母子健診にこころのケアチームが出務し、子どものメンタルヘルスにも気をつかわれていた。

(所感)

今回、被災地支援にあたり、3日間の活動期間でどれだけのことができるかという不安はあった。その中で、①大阪府からのミッション「1チーム制に向けた業務整理」②被災地の行政保健師と派遣保健師の連携 ③被災地での直接支援を大きなテーマとして活動した。3日間の保健師活動は、感染症予防、避難所や全戸訪問を通じた健康管理、健康課題の抽出、こころのケア、次の健康問題への提言等多岐にわたっていたが本当に保健師らしい活動ができたと思う。津波が地域や人々の心に残した傷は本当に深い。町が再興するまでにどれくらいのかかるのか、その土地に実際に行き痛感した。せめて人々が心身共に健康な状態を保て、これから先のことを考える元気がもてればと思う。

被災地への支援を認めていただき、貴重な経験をさせていただきましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

派遣報告書

健康福祉部 糸川 真実 (任務：保健業務支援)

派遣先：岩手県宮古市

派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 9 月 30 日

<宮古市の概況>

宮古市は、岩手県沿岸地方に位置し、岩手県内最大面積の約 1,260km²、人口は 58,917 人で、水産業が主な産業である。

<被災当時の宮古保健センターの様子>

3 月 11 日 14 時 46 分に震度 5 強の強く長い揺れが起きた。宮古保健センターでは 1 歳 6 か月児健診が行われており、3 組ほどの親子がフロアに残っていた。屋外に避難し、アスファルトにしゃがみこみながら長い揺れがおさまるのを待った。

14 時 48 分：津波第 1 波到達 (0.2m)。

14 時 49 分：岩手県に大津波警報発令。職員全員が親子を誘導しながら高台へ避難した。

15 時 26 分：最大波到達 (8.5m 以上)。最大遡上高は 38.9m。

防波堤より高くなった波は一気に市街地へあふれ出た。

津波が建物を壊しながら進むのを見て、保健センター職員と親子は高台から山を登り、中学校へ避難した。

- ・宮古保健センターは完全浸水、半壊・使用不能となり、宮古市役所は床上浸水した。
- ・宮古市最大の被害が出た田老地区では田老万里の長城と呼ばれた堤防の半分が崩壊し、田老保健センターは床上浸水した。



市役所前の交差点



市役所前

＜宮古保健センター仮事務所＞

5月、避難場所であった中央公民館2階に宮古保健センター仮事務所を開設した。以前の保健センターは改修せず、移転先や移転時期は全く不明。

冷房がない夏は暑く、わずかな暖房で冬は寒さが厳しい。

田老保健センターも床上浸水で修繕中のため、田老保健センター保健師2名もこの仮事務所へ移動した。



＜8月、9月の宮古市の様子＞

へドロはなくなり、瓦礫の撤去が進められ、解体待ちの家屋が残っていた。二車線以上の大きな交差点の信号が復旧している途中だったが、単線道路の信号は壊れたままであった。交通量の多い時間帯には県外警察官により交通整理が行われた。節電のため19時には店舗が閉まり、街灯がほとんどないため、日没後の町は真っ暗で自転車のライトを点灯しないと移動できない場所も多い。

(9月末の派遣終了までに街灯の数は増えてきている。)

8月10日に最後の避難所が閉鎖され、仮設住宅や民間住宅へと移った。修繕中または修繕待ちの家屋に住む人は、2階で生活し、1階は未だに使用できない状態であった。修理業者のマンパワー不足で、2011年内に修繕完了できればよいが、修繕できずに冬を越さねばならない家屋が多いと予想される。

宮古市の被害状況 8月時点

| | |
|-------|--------|
| 死者 | 518名 |
| 行方不明者 | 124名 |
| 家屋倒壊 | 4,675棟 |



市役所近く、鵜ヶ崎地区住宅街



市役所すぐ横の地域



気持ちを表出できることは良い。
「今までありがとう」という書き込みも見た。



田老地区メインストリート。両脇は商店街だった。



田老地区。約200人が亡くなった。

< 8月、9月の宮古市への保健師の派遣状況 >

大阪府・大分市・下関市・東京都などからも同時期に保健師の派遣があったが、7月で大阪府以外からの派遣は終了となった（大阪府より8月…3人体制、9月…2人体制）。

大阪府の派遣形態は宮古市と併任勤務で宮古市職員となるため、災害業務以外の通常業務へも従事した。9月末で大阪府から宮古市への保健師派遣は終了、私たちが最後の県外派遣保健師となった。今後は岩手県保健師へ応援要請していく。

活動内容<災害業務>

①仮設住宅家庭訪問

岩手県内では半年毎に保健師が仮設住宅の全戸訪問ローラー作戦を行う計画である。

宮古市では5月から入居が始まり、建設完了にあわせて随時入居している。

入居後の住人名簿を片手に、対象者の家を訪問するが、名簿が間に合わない場所では、住人を聞き取ることから始まった。

世帯住人全員の健康状態を聞き取りで確認し、必要な人には血圧を測定し、8月は熱中症予防啓発、9月は冬の寒さ対策についての資料を配付した。自分のプライベート空間が確保されたことから、ようやく安定したという人が大多数だが、避難所とは異なる孤独感や無力感を感じる人（特に独居世帯）や、考える時間が増えたので漠然とした不安がぬぐえないという人もいる。

他市町村から宮古市に逃れてきた人も訪問対象であり、山田町民や大槌町民は居住環境の変化から、心身ともに疲労が大きい。

次回ローラーは平成23年10月から開始予定。なお、保健師と同様に栄養士も岩手県栄養士会の協力を得て、全戸訪問を行っている。

→保健センターで地区担当保健師（宮古市職員）と全件カンファレンスを行う。

要フォロー者：派遣保健師または宮古市地区担当保健師が再訪問を行う。

必要時には、栄養士や心のケアチームへつなぐ。

フォロー無し：半年後の全戸訪問ローラー作戦で確認。

（事例）

- ・消防団の仕事があったため、被災時は妻と別々の方向へ分かかれ、妻を失った70歳代男性。
- ・エアコンを使用せず玄関・窓も閉め切り、安否が心配される高齢者独居男性。
- ・山田町民。津波の被害は免れたが自宅が全焼して「悔しい」と怒る鬱病の妻をもつ夫。

仮設住宅。建築業者によって、作りだけでなく、湿気や寒さ対策なども異なる。



②被災地区家庭訪問

被災直後の3月～4月に派遣保健師が被災地区を全戸訪問しているが、避難所や他市・他県に逃れて不在だった者を8・9月に再度全戸訪問し、居住者の把握と健康状態の確認を行った。また、要フォロー者の継続訪問も多い。住民名簿と地図を頼りに訪問するが、家がなかったり、道が機能していないなど地図と実際の景色が全く異なるので、道に迷いやすく、家に辿りついても居住していない世帯も多く、訪問活動は困難だった。

仮設住宅住民が重視されやすいが、一方で被災地区の家屋が残った住民も被災者である。仮設住宅には野菜の移動販売、慰問イベントなど人の出入りが毎日多数あるが、残された家々への支援の手はほとんどない。また、家が残った＝津波が到達しにくい場所だったことから、多くの人が高台や自宅の2階から津波が来る景色を目撃している。

「家が残ったのだから私は恵まれている」と自分の気持ちを表出しない人が多く、仮設住宅入居者だけでなく、被災地区居住者も閉じこもりや鬱病のリスクが高い印象を受けた。修理業者マンパワー不足のため、家屋修理が完了している者は半数で、現在も被災した1階部分の修理を待ちながら2階で居住している人がいる。修理後に2階から1階へ荷物を下ろす際、ボランティアに来てほしいと言う高齢者が多い。

→保健センターで地区担当保健師（宮古市職員）と全件カンファレンスを行う。

要フォロー者：派遣保健師または宮古市地区担当保健師が再訪問を行う。

必要時は、栄養士や心のケアチームへつなぐ。

フォロー無し：フォロー終了。

（事例）

- ・避難所生活の頃から他人の話し声が気になって不眠が続く 50 歳代女性。
- ・血圧が 200/100mmHg 以上だが、服薬管理不良の女性高齢者。「病院に連れてってもらうために息子の仕事を休ませられない」と話す。



高台のため、家屋に津波の被害はない。



高台からの景色。(津波の被害をすべて見てしまった人が多い。)



工事未定。1階部分は被災したまま、2階で暮らしている



地図上ではこの先に家があるため、進む

③仮設住宅健康教室・健康相談

各仮設住宅の集会所または談話室で、検尿・血圧測定と個別健康相談を実施した。

健康相談のあとに、保健師や栄養士が鬱病予防・熱中症予防・高血圧予防の講義、運動実習などを行う。

地域の精神科医による PTSD 予防・自殺予防の講義では「絶対に自殺しないでください」という直接的なメッセージを発信した。口角をあげる『あいうえにっこり体操』には見本に宮古市保健師と市長の顔を起用し、市民の気持ちを勇気づけた。「避難所でがんばりましたね。仮設に移ったこれからはがんばらな

いください。」という精神科医の言葉に涙ぐむ人が多かった。

集会所や談話室で事業を行う際には、事前に保健師や保健推進員がチラシやポスターで案内をした。参加者数が多い所は、もとの自治会の結束力や地域のつながりが強く、住人同士がお互いの健康状態を把握して、熱中症注意の声かけや散歩に誘い合うなど主体的に健康管理が行っていた。



血圧を測定して、健康相談



あいうえにっこり体操



介護予防教室4回シリーズ



高血圧予防の指導をした

活動内容<通常業務>

①乳幼児健診（1歳6か月児、3歳児）

5月から再開。津波でカルテが流されたため、以前の健診情報がなく、丁寧な聞き取りが必要であった。被災後から栄養士も全児対象に面接指導を行っている。毎回、保健師と栄養士が全ケースを振り返り、健診従事者全員でフォロー方法を検討した。

②成人がん検診

8月から再開。問診業務に従事。

③特定健診事後結果説明会

8月から特定健診再開。今年度は特定保健指導を実施できないため、特定健

診事後結果説明会を行い、希望者に個別面接で健診結果の説明と保健指導を実施した。集団健康教育では保健師がメタボリックシンドローム、栄養士がバランス食・減塩について講義した。

感想

赴任して半月後、宮古市民の多くが初盆を迎えました。宮古市のお盆は 8/1、8/7、8/13、8/14、8/15、8/16、8/20、8/31 に自宅前で松明かしと花火を灯して先祖や亡くなられたかたの霊を祀ります。連日灯される松明かしに、宮古市民はもともとのお盆を大切にされている印象をうけました。まだ行方不明の家族が見つからない人、祭壇を流された人など、どのようにお盆を迎えたらいいかと戸惑いを抱える市民も多数いました。お盆を区切りに前を向き始めた人、被災や死を受け止められないままのお盆行事に疲労を感じた人など様々でしたが、このお盆は一つの節目となりました。

災害業務の中では、特に訪問業務の重要性を何度も感じました。「通常、PTSD の治療は半年程度だが、今回の被災の PTSD 治療は1年以上要する見込みだ」と現地の精神科医師は判断しています。被災当時の苦しみを抱えたままの孤立や PTSD、鬱病のリスク者を訪問先で発見し、心のケアチームにつないだケースが8・9月にもあります。これらのケースは「今まで誰にも言えなかった」「人前で泣かないようにがんばっていたのに」など泣きながら話され、訪問は長時間に及びます。訪問をしなければ発見できなかったケースです。

気持ちを表出しにくい東北地方の気質がありますが、室内の様子を観察し、会話の中から健康面を聞き出し、心身の不調や健康課題を引き出す家庭訪問業務は保健師活動の原点です。精神科医や臨床心理士による“心の相談”には「大丈夫です」と最初は消極的になる市民が多いのですが、日頃から訪問や健康相談で地域に出向いている保健師には気持ちを表出することができ、保健師から心のケアチームへつなげることができていました。訪問業務を仮設住宅だけでなく、被災地区の残った家屋にも行ったことが、宮古市の素晴らしい保健活動の一つだと思えます。

9月の派遣終了時点で、宮古市保健師に聞くと、「今、災害業務と通常業務は7：3」だと言っていました。通常の母子健診フォローや成人の特定保健指導

に十分に取り組めない状態がしばらく続きそうです。10月から2回目の仮設住宅ローラー訪問が始まり、これから発見するフォローケースは深い課題を抱えて長期化することが予想されます。まだやるべきことはたくさんありました。帰らなければならない私たち派遣保健師が次にすべきことは、伝え続けることだと考えています。宮古市の保健師だけでなく、健康課事務職員からも動画や写真をたくさん託されたので、被災の現状と復興への取り組みを忘れないように、そして、確実に起こり得る東南海地震に備えて、多くの人に伝え続けたいです。

最後になりましたが、今回の被災地派遣では多くの人に支えられ、役割を終えることができました。宮古市職員と市民が一丸となって復興に取り組む、そのお手伝いをさせていただく機会を与えてくださった宮古市、大阪府、箕面市に心から感謝しています。今後も宮古市を訪れ、変化の様子を見聞きし、宮古市職員と市民に協力し続けたいと思います。

職員手記

健康福祉部 糸川 真実 (任務：保健業務支援)

派遣先：岩手県宮古市

派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 9 月 30 日

報告書に書けなかったこと…

・ 2 か月間の食生活の変化

ホテルで朝夕食の提供がありました。昼食は定食屋で外食したり、保健センターで宅配お弁当を頼んでいました。

全ての料理の味付けの、醤油・味噌などの塩分がとにかく濃いです。薄口醤油がない。

みんなで気をつけて残していましたが、他市保健師も私も血圧が 20 上昇しました。帰阪後 10 は下がりましたが、その後なかなか下がりません。

また、毎日魚ばかり食べていたので、最初は下痢になりました。大阪に戻って肉／魚が半々の生活に戻ると、帰阪 10 日後に急性虫垂炎（盲腸）になってしまいました。

結構、身体にできていたように思います。

・ 心理面

被災地での生活は毎日しんどいことが多かったですが、書くことが多すぎて日記は 1 週間でギブアップしたほど、充実していました。

それよりも、大阪に帰ってからの 1 か月が人生で一番しんどく、毎日泣いていました。

被災地で店が 19 時に閉まるから夜は真っ暗で、街灯もないので真っ暗というより真っ黒の世界。 夜はローソンの光しかなく、ローソンぐらいしか行く所がない生活から一変し、 大阪の街が明るすぎて、目眩がして気持ち悪かったです。

震災を忘れたぐらい平和な大阪の暮らしも申し訳なく思っていました。

まだまだたくさんの仕事があったのに、帰ってこなければならなくて、大阪での仕事へ向き合うことができませんでした。

箕面市の風景で宮古と似ている場所を見たとき、カルテで宮古で会った人と同じ名字を見たとき、宮古のホテル朝食でほぼ毎日出た納豆・卵・きんぴらごぼう...などを食べたとき、そんな物凄く些細なことで、宮古の風景や被災者の顔がフラッシュバックして仕事中でも泣いてました。

電車のアナウンスの「都島方面...」と言うだけで、「宮古」にフラッシュバックしてしまうこと、想像できますか??

そうやって大阪にある宮古につながる物事を見つけては泣いていましたが、少しずつ納豆や食事や景色を見ても「悲しい」から「懐かしい」という感情に変わって、今は宮古市のニュースも見られるようになりました。

そして、これは一番驚いたのですが、派遣前の職場に戻るだけなのに、仕事が全然分からなくなっていたことです。

人の名前、地区の名前、物品の場所など全てが宮古市に上書きされてしまい、取り戻すのに苦労しました。あれだけ関わっていたリスク重度の虐待ケースの名前を言われても 全く誰のことだか分からなくなっている自分に驚きました。

元の職場に戻る・元の家に戻るのではなく、「新しい職場に移動する・新しい家に引っ越す」という感覚に近かったです。

また、自分の気持ちを打ち明けられる人がなかなかいませんでした。

「現地に行った人にしかこの気持ちは分からない」というのは、相談されたほうも私も感じているため、大槌町に行った西田さんや勝川さん、宮古市で一緒に過ごした他市保健師と電話をして、岩手に戻りたいという、帰阪後に味わう苦しみを共有し、ピアカウンセリングしていました。

健康増進課の先輩たちが私がいんどそうなことに気づいて、帰阪後に休めるように事業調整してくださったのでありがたかったです。

「岩手に戻りたい」とずっと思っていたのですが、帰ってから2か月経った12月ぐらいから、ようやく、「行きたかったらまた行けばいい」と自分で切り替えることができました。

宮古市職員が代わる代わる週に1回は連絡をくださるので、今も絶えずメール交換をしています。

1月は被災以来東北を出ていない宮古市職員を大阪に招いて、観光をしました。

3月1週目の週末は宮城県気仙沼にボランティアに行きました。

3月2週目の週末（3・11）はとても大阪にいるような気分になれないので、宮古市支援に行っていた吹田市・河内長野市・泉南市保健師と宮古市に行きました。

遺品返却ボランティアをして、追悼式に出席し、保健センターの人に会い、被災地を車でまわりました。宮古市長にもお会いする機会がありました。

5月には宮古市長が「震災復興フォーラム」のため、関西に出張に来られるので、宮古市派遣の大阪チームで食事をする予定です。

こうやって、きっと半年に1回以上は宮古市や岩手県などの被災地に戻って、一緒に働いた宮古市職員、仲良くなった市民、安否が心配な市民を訪ねたくなると思います。

でも、この被災地派遣のおかげで、大阪の防災にも興味をもつようになり、東南海・南海地震への対策は個人レベルで徹底して準備しなくてはいけないと思いました。今回の宮古市職員と市民の経験から学び、次の災害に役立てることを私も東北の人も望んでいます。

だから、いつか来る近畿の地震のために、そして岩手の人のためにも保健師の仕事をずっと続けたいと思うようになりました。

こんなふうに自分が思うとは、予想していませんでした。

宮古市で働けたことを、宮古市・箕面市・大阪府に心から感謝しています。

もし、今後も岩手県に保健師派遣の要請があれば、ぜひ行きたいです。

今年の3/11に宮古市に行ったあと、大阪に戻っても違和感なく働いています。切り替えの方法が分かったので、今後、被災地支援の機会があっても、戻ってから大阪への順応もできると思います。

秋以降であれば、個人的には調整できると思うので（職場が了承するかは分かりませんが）、もしも要請がありましたら、お声かけてください。

| |
|--|
| 現地からの職員レポート （後任の参考に、現地での生活状況を報告したメール） |
|--|

| |
|-------------------------|
| 健康福祉部 糸川 真実 （任務：保健業務支援） |
|-------------------------|

2011/08/29（糸川→職員課）

宮古市

宮古市の状況と保健師活動

- ・宮古市は町が合併して大きくなったばかりで、お金に若干余裕があった。政策は早めに判断できている。
- ・生死未把握なし。避難所は 8/10 に閉鎖した。
- ・仮設住宅を 8 月末までに全件訪問予定。3 回不在なら訪問したとカウントする。
- ・土地柄で、お盆を大切にされている。今年は初盆になる人が市民にも職員にも多いため、お盆期間は 9 割くらいが休み。お盆の訪問は良くないということもあり、派遣保健師はその間 5 日間入力作業の手伝い。
- ・派遣保健師は 17:30 には保健センターを出るように言われているので、残業はなし。
- ・冬は 16:00 日没、17:15 には真っ暗になる。
- ・8 月に保健師の新規採用募集をしている。

宮古市の宿舎（沢田屋）と生活

- ・旅館の 2 人部屋。トイレは室内とパブリックスペースにいくつかある。お風呂は室内のユニットバスと大浴場があり、大浴場を利用している。食事は朝食と夕食が出る。2 日に 1 回部屋の掃除をしてくれる。
- ・徒歩 10 分のところにコインランドリーが洗濯機 6 台、乾燥機 3 台で混雑。2 日に 1 回洗濯しており、1 回 2 時間かかる。
- ・泉南市の保健師と同じ部屋。その人は大槌町の戸籍担当事務職員と仲がよく、休日是一緒に出かけようとしているが、相手が忙しすぎるため、会わない日もある。
- ・衣食住には困らないが、マイカーがないため、息抜きできない。
- ・週末は宿舎にいると職場にいるような感覚が離れず、リフレッシュできない。街は被災しているため、土日のうちどちらか 1 日でも遠くへ行かないと気分

が減入る。

- ・移動手段は自転車かレンタカーで、自転車だと遠くに行けない。レンタカーは1日1万円で費用が高くなってしまう。タクシーで花火を見に行ったら片道20分で3400円かかった。街から出られないストレスをお金で解消する感じ。
- ・週末どう過ごすかを決めるのもストレスあり。観光案内所は18:00までで早く閉まってしまう。すべて自分で計画・調べて出かける。

感想

期間の長さ

- ・1週目は慣れない2人生活でとても長く感じ、ホームシックになった。2週目は慣れた。3週目には生活に自信が持てるようになったが、今後のことを考えると長いと思う。
- ・最初の2週間を乗り越えると後は短く感じられるかもしれない。しかし、1か月以上は長い。今回はお盆があり、供養の花火や盆踊りなどの行事で一息抜けた。1度帰省できることもあって区切りがつけるが、秋・冬はそんなイベントもないため、とても長く感じると思う。

保健師活動

- ・人口が少なく、保健師活動が丁寧。
- ・地域の方は保健師として認識してくれるので、素直な保健指導ができる。
- ・全戸訪問を行うので、保健師活動の原点が学べる。
- ・全件カンファレンスで全ての家庭状況を把握している。大阪では考えられないことなので、ゆとりがあると思った。
- ・ボランティアではなく、宮古市の公務員として活動するため、地域の人に感謝されながら働くことができる。公務員になれて良かったと思った。
- ・宮崎チームや東京チームなど、派遣チームは避難所を担当するが、今回のように職員として派遣されると、乳幼児健診やがん検診、それらの入力などもできる。普段の保健師活動に近いので、地域の状況をよく理解できる。

心理的負担

- ・家庭訪問で対象者の話を聞くごとに涙していた。代理体験で、保健師も心的

ストレスを受ける。1日2時間話を聞くだけでも心的障害（PTSD）のスイッチが入ると現地の臨床心理士に教えられた。

- ・一人でご飯を食べることのストレスがある。保健センターの人や相部屋の泉南市保健師と食べることもあり、それも良いが、3日に1回は普通の話がしたくて、大阪の人に電話している。

大槌町

大槌町の状況

- ・宮古市より被害が大きい。
- ・職員被災が多く、保健師は7人中5人死亡。2人しかいない。
- ・役場がなくなり、指導者がいない？（みどり街づくり課の西田さんも一人でやっている？）
- ・今年だけお盆は全庁閉鎖。
- ・信号が普及していないため、危険。がれきも多い。
- ・通勤は宿泊先の遠野町から大槌町の役所まで2通りのルートしかなく、両方も峠道で、片道1時間30分かかる。
- ・派遣職員はマイカーが1台割り当てられるが、道路事情が悪いため危険。
- ・泉南市から派遣されている戸籍担当の事務職員は、毎日20:00～21:00まで残業。毎週土日もどちらか1日は勤務している。今週は土日両方勤務。時間外手当が1か月で25万円になるほど働いている。
- ・残業が多く通勤時間が往復3時間になるので、帰ったら寝るだけの生活。

大槌町の保健師活動

- ・保健師情報なし。
- ・避難所がまだあるかもしれない。

大槌町の宿舎と生活

- ・2人部屋。手前と奥で1人1人使えるようになっているが、手前はテレビあるが奥の人が出入りするたびに通られるため、プライバシーが確保できない。逆に奥の人はプライバシーが確保できるがテレビがない。
- ・鍋や皿、掃除道具、シーツは持参。
- ・風呂、トイレ、キッチン共同だが、掃除は自分達でしなければならない。

掃除の役割分担や掃除方法の違いなど、気を使うことが予想される。

- ・自炊もできるが、帰宅時間が相部屋の人とそれぞれ違うし、帰宅が遅いため、外食になってしまう。
- ・冷暖房がなく暑さで寝ることができないため、休日は車を走らせ、車の冷房で暑さをしのいでいる。
- ・割り当てられるマイカーがみどり街づくり課と合わせて 1 台になってしまうと、週末も一緒に行動もしくは譲り合いで気を使うことになる。
- ・週末リフレッシュできない恐れあり。

大槌町の冬

- ・冬の遠野は雪道のため、圧雪のため、スケートリンクの上を車が走るような状態。軽自動車は危険、四駆がいいと勧められている。
- ・ブレーキを踏まない特殊な運転が必要。時速 20km 以下となり、通勤の 2 ルートのうちひとつ（笛吹き峠）はかなり危険なため、地元民も「絶対使ってはだめ」と言う。
- ・もう一方の仙人峠に集中し、更に渋滞する。雪が降った翌日などは、朝 7:30 出勤していた人なら朝 6:00 出勤になる。
- ・雪の怖さを知らない観光客などは、ブレーキを踏まずに運転することを知らないため事故を起こす人が多い。
- ・冬は外に出られず、更にリフレッシュできないのではないかと。
- ・現地の人からも雪を体験している人が派遣されたらいいのにと言われた。
- ・大槌町で働くにしても、同じ 1 時間半通勤なら遠野町ではなく宮古市の沢田屋に泊まって海岸線を通ったほうが峠道を通らなくて済む、雪のリスクが減るのにと宮古市職員の助言あり。

他市の保健師派遣状況

- ・大阪市 8 月から宮古市へ 2 人を 1 か月ずつの予定だったが、8 月 1 人派遣で終了することに変更。
- ・岸和田市 9 月中旬から宮古市へ 3 週間の予定だったが、中止となった。

(2011/09/05 糸川→健康増進課)

健康増進課の皆様

宮古市の糸川です。

一時帰宅のときに総務課が貸してくれたパソコンがようやくネットにつながりました！これからは写真で報告もこまめにできると思います。

やっぱりパソコンは必要でした…。今まで報告が少なくて申し訳ありませんでした。

大槌町にいる西田さんが職員課と私にも派遣状況報告のメールをくださったので、抜粋して転送いたします。

現地の様子では宿泊先の遠野市⇄大槌町の車移動は冬は不可能の判断のようです。

宿泊先を宮古市または釜石市も検討しているみたいですが、雪は降らないけど、毎日凍結はします。

沿岸部は北から宮古市⇄山田町⇄大槌町⇄釜石市となっていて、私も週末に車で通りました。カーブが多くて、交通量も多いです。雪と同じで、時速20キロ以下の運転と、ブレーキを使わない特殊な運転方法が必要だそうです。

のろのろ運転で冬は渋滞するので、2時間の通勤は見ていたほうがよさそうです。

私の相部屋の泉南市保健師さんの泉南市同期が大槌町で戸籍事務をしているので、聞いてもらった新たな情報としては、8月は高石市の保健師さん（47歳）、9月は東大阪市の保健師さん（57歳）がいて、相部屋しているらしいです。

今までの保健師は1か月交代のようです。

大槌町は生存保健師の数が少ないので、その場で判断することが求められるためか、経験年数の長い保健師が行っているみたいです。

ちなみに、支給されている車はカーナビなし、コンパクトカーではなくプリウスのやや大きめの普通車らしいです。（大きくないと冬は無理だそうです。）

派遣期間の短縮や宿泊先を変更しても、根本的に雪と凍結運転に自信がなけ

れば、派遣は難しいのではないかというのが現地職員や現地にいる派遣職員の意見です。

(2011/09/20 糸川→健康増進課)

健康増進課の皆様

おはようございます。

近畿の雨が心配です。大丈夫でしょうか。

こちらも台風と前線の影響で今週は雨です。

昨日から最高気温16℃、朝夕は12℃になり、秋がなく冬になった印象で大阪チームはぶるぶる震えています…。

18日(日)に大槌町にいる西田さんと会って話をする事ができました!

西田さんがAさんが大槌町に来ることを広域連合のBさんに聞いていて、釜石市の宿泊をかなり心配していました。

「知らないで来るとびっくりするから伝えてあげて」とおっしゃっていて、大槌町・宮古市には私たちがいるけど、釜石市には誰もいないので情報が少ないから釜石市の様子を見に行ったらいいかも、とアドバイスを受けて、19日(月)に私も車で行ってみました。

Aさんが泊まるホテルマルエも行ってみました!

もう少し暗くなるまでいたかったのですが、釜石市→宮古市に暗くなると2時間で戻れないのですみませんが17:15までで退散しました。17:30には完全に日没でした。

西田さんに聞いたお話と私が見たことを以下にまとめました。

急いで書いたのでまた箇条書きで申し訳ありません。

出発までに気になることがあったら教えてください。

西田さんも私も、こっちにいる間にたくさん情報を伝えたいと思っているので、すぐに調べます☆

近畿の台風被害が出ませんように...皆様、気をつけてください。

ホテルマルエの情報

- ・ホテルの1階共有スペースに電子レンジ、お湯などがあります。
- ・女子風呂は湯船が1. 5人の広さ、シャワーは1つでした。浴室は鍵がかけられます。脱衣場は洗面台とイスが2つずつ。2人用の風呂なのか1人用の風呂なのか不明…
- ・女性のみコインランドリーが使用できるが、洗濯機1台、乾燥機1台のみ。
- ・自転車は無料レンタルできる。玄関に5, 6台ありました。
- ・この日は女性客4人、男性客5人の姿を見ました。(宮古市ホテルは圧倒的に男性客が多いです。)
- ・部屋の広さはベッドがぎりぎり入る広さなので、人が1人立つとスーツケースを広げるスペースがないらしいです(西田さん談)。
- ・ホテルマルエ近辺にコインランドリーはないそうです(ホテル従業員談)。

ホテルマルエの近辺(西へ)

- ・徒歩10分の場所に釜石駅やローソンあり。
- ・徒歩15分の場所にスーパー「マイヤ」夜22時まで、クリーニング屋、薬王道、ケーズデンキあり。
- ・マイヤは夜に行くとお総菜やお弁当はほとんど売り切れているらしいです。
- ・薬王道はドラッグストアで何でもそろいます。
- ・こちらへの道は舗装が残っているので、凍結していなければ自転車でも行ける。街灯も信号もあり、交通量は多い。
- ・釜石駅から徒歩1分にまんぷく食堂がありますが、11:30~15:00 営業。
- ・その他、こちら側には外食できる店はない。

ホテルマルエの近辺(東:市街地へ)

- ・商店街があるけれど、壊滅的でぼろぼろの店や家が残されています。
- ・店は全く営業していない。
- ・夜は危険なので来てはいけない。
(なぜ危険か?) 街灯が全くない、信号が止まっている、交通量は多いので事故に気をつけて歩行しなくてはいけない、暗い色の服だと車から見えない、瓦

礫や歩道が崩れている状態なので自転車は絶対に禁止、歩くのも障害物につまづきやすい。もしも歩くなら懐中電灯が必要。人通りも少ない。

- ・こちらの方向にホテルサンルートとベイシティホテルがある（ホテルマルエから気をつけて歩いて15分ほど）。大槌町勤務の人も滞在しているが、堺市の建築職は9月末までで、今後の釜石市滞在者がいるのかは不明。
- ・こちらの方向に車で20分の距離に弁当屋があるらしいが、ここしか食事とれる場所がなく、弁当屋待ちの車で渋滞になる。弁当屋には歩いては行けない（危険なので）。

釜石市の衣食住

- ・食事は毎日外食だけど、スーパー「マイヤ」で買ってくるという選択肢しかないです。
- ・コインランドリーと浴室は取り合いが予想されます。
- ・部屋が狭いので荷物たくさん持参してはいけない、なるべく荷物を少なくする努力が必要かもしれないです。必要な物が出てきたらあとで送ってもらう。

釜石市の印象（宮古市糸川）

- ・被害のひどさと言うよりも、宮古市に比べると復旧が遅い印象です。
- ・宮古市は毎日家が解体・撤去され、空虚な何もない空間が広がっていたのがしだいに草が生い茂って、何があったか思い出せないぐらい草原のようにも見えます（それも悲しい景色なのですが…）。
- ・宮古市も解体・撤去してない家のごろごろあるけれど、釜石市のほうがごろごろごろ…とある印象でした。解体・撤去がすすんでないので、町が荒廃している景色です。解体・撤去がある家にはカラスが群になって集まりました。
- ・歩道の整備ももう少し時間がかかりそうで、道がぼこぼこ、石やコンクリートがごっごっしています。
- ・商店街の店が再開していないので、灯りがありません。
- ・街灯もありません。宮古市は私がいる2か月でずいぶん街灯ができました。
- ・町の印象として宮古市の2か月前ぐらいの状態なのかなあ、と思いました。もちろん、教育・福祉・医療や仮設住宅やどの分野の復旧を急ぐかは自治体によって違うので、宮古市が優れているわけではありません。宮古市もまだ

まだです。

その他（大槌町西田さんの言葉をそのまま使ってます。）

- ・大槌町での昼食はローソンまたは救援物資で余っているレトルト、インスタント食品の二択だけ。大槌町の仮設ローソンは周囲に店がローソンしかないため、全国一の売り上げらしいです。
- ・スキーやスノボをしない人には冬は観光は温泉以外ない。小岩井牧場も冬季は休園。
- ・毎週温泉では、リフレッシュできるのか心配。
- ・ぎりぎりの生活が成り立つぐらいの復旧だけど、あくまでも気をつけた方がいいというレベルの話です。どれだけ我慢できるかで、住みやすさが決まると思います。2日続けてローソンのオニギリは無理、という人には釜石市と大槌町は厳しいと思います。
- ・大槌町や宮古市は私たち派遣職員がいるので、情報を渡せますが、釜石市の詳細は分からないので、事前になるべく釜石市の写真や被害状況を見ておいてください。知らないで来るとびっくりすると思います。
- ・大槌町の状況は現地で引き継ぎ受けられるので、現地で知れば大丈夫です☆

派遣報告書

総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 10 月 5 日～10 月 31 日

1. 勤務場所

大槌町役場 (仮庁舎) 福祉課 健康推進班



2. 健康推進班の概要

(1) 主たる業務内容

母子保健・成人保健にかかる業務

(2) 班員

班長以下 7 名 班長：栄養士 1 名

主任主査保健師 1 名

保健師 3 名 (うち 1 名新規採用職員)

栄養士 1 名 (新規採用職員)

事務 (臨時職員) 1 名

3. 勤務状況について

(1) 通勤方法

車の貸与を受けていなかったため、同時期に大阪の市町村から派遣されている職員 (本市含む) で、大槌町から車の貸与を受けている職員の車に同乗

し通勤。退庁時間が異なる場合のみ、路線バスを使用。

(2) 1日の流れ

| | |
|--------|------------|
| 8時30分 | 始業開始とともに朝礼 |
| 12時 | 昼休憩開始 |
| 13時 | 午後の業務開始 |
| 17時15分 | 終業 |

*派遣保健師については残業なし

(3) 業務における派遣保健師の役割

町役場の保健師は各担当業務が割り振られているが、派遣保健師には業務を主担で割り振られてはいない。遅れ遅れになっている通常の保健事業を再構築し、実施していくために、各保健師の担当業務のサポートが派遣保健師の役割でした。

(4) 実際に従事した業務

【仮庁舎内にて】

- ◆ H23 年度予防接種者（定期接種以外）の履歴表の作成
- ◆ 予防接種履歴の一覧発行（町民さんから依頼があった場合）
- ◆ 健康管理システムへの予防接種（定期接種）履歴の入力
- ◆ 高齢者インフルエンザ予防接種に関すること
 - ・ 町民向けのインフルエンザ予防啓発の資料作成（健康相談や健康教室で使用）
 - ・ 医療機関へのインフルエンザ予防接種事業の説明書の作成
 - ・ インフルエンザ予防接種に関する案内（A4で4枚）（広報とともに全戸配布）
 - ・ その他関係資料の作成
- ◆ ガン検診対象者抽出・名簿作成
- ◆ 電話・窓口対応



仮設庁舎

【仮設保健センターにて】

- ◆ 3歳児健診
- ◆ ポリオワクチン予防接種（2回）



仮設保健センター



※保健センターでの業務実施時には、保健師学生（実習生）も参加。

【仮設住宅集会所にて】

- ◆ 仮設住宅への巡回健康相談（2回）

4. 生活面について

（1） 滞在先

大槌町役場から車にて2，30分の釜石市内のホテルに滞在。滞在ホテル自身も津波で被災しており、津波警報時には高台への避難を必要とする場所にあったことから、念のため、常に避難できる準備をしていました。

（2） 生活物資について

ホテルから向かって駅方向では、スーパーやコンビニ、飲食店などが被災前と変わらない様子で営業されており、生活に必要なものは全て徒歩圏内で賄える状況にありました。

（3） 通信状況

職場、滞在ホテル共に携帯電話やインターネットなどの通信状況に特段問題はありませんでした。

5. 被災地の状況

震災から7カ月が経過しようとしている時期でしたが、瓦礫が山積みされ

た場所があったり、解体を待つ建物がかかなり多く残っていたり、復旧していない信号もまだ多く、交通量が多い場所では警察官が手信号をしている場所がありました。また、地盤沈下で大潮の際、道路が冠水する地域がありました。



冠水の様子



6. 派遣任務を終えて

大槌町の保健事業が少しでも早く元の軌道に戻り、町の保健師さんたちが少しでも多く町民さんと関わる時間がもてるよう、陰ながらお手伝いさせて頂けたらという思いで、約1ヵ月間過ごしてきました。

1か月という時間は非常に短いもので、あっという間に過ぎていきました。

私が着任した時期は少し事業が落ち着いてきている頃でしたが、全ての資料がなくなり、何もないところからもう一度作り上げていく作業は本当に大変なものだと感じました。4月末の仮庁舎開庁以来、ずっと走り続けてきて町の保健師さんたちは、皆、今の方が疲れを感じていると仰っていましたが、そんな状況にも関わらず、町民や仲間を思い合いながら、一步一步着実にしっかりと前に進んでいく保健師さんたちの姿からは“真に生きること、生きる力、働くこと”など多くのことを学ばせて頂きました。

また町民をはじめ、岩手県の方から、何度も心の琴線に触れるような心のもった「ありがとうございます。よろしくお願いします。」という言葉をかけて頂き、人を思い合う大切な心を多くの場所で感じました。

無事に1か月の任務を終えることができたのも、多くの方のサポートがあったからこそだと感じています。現地で感じたことや経験してきたことを、これ

からの仕事に活かしていくとともに、今後も被災地への支援で、自分ができることをやっていきたいと思います。

最後になりましたが派遣に際しお世話になった各関係者の皆さまに、この場を借り感謝申し上げます。ありがとうございました。

職員手記

総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援)

今回の被災地派遣の話は、全く予想をしていなかった話でした。

でも被災地の悲惨な状況をテレビなどで見た時から、どんな形であれ支援をしたいと思っていましたから、話を聞いた瞬間、心が迷わず行くことを決めました。

ただ、被災地からの派遣要請は、地域保健師であり、先輩派遣保健師から「未経験で行くことには無理がある」などと言われておりましたから、経験のない私が行くことには、やはり不安はありました。 【編者注：勝川保健師は、産業保健師として箕面市に勤務】

しかしながら、自分にしかできないことがきっとあるはずという気持ちもあり、微力でも力になればと思い、派遣を決めたのでした。

赴任当日は、朝一番の飛行機で飛び立ち、その日の午後から勤務に就くことになりました。

大槌町の役場は津波で流され、仮庁舎であるということは現地へ行く前から聞いて知っていましたが、実際流された役場や町並みを目の当たりにすると、言葉では言い表せないほどの壊滅状態で、震災から半年以上の月日経っているのにも関わらず、復興は程遠い状態でした。



役場の業務も復興途上の真っ最中という感じを受け、実際、復興までにはまだまだ時間がかかるなという印象でした。

旧大槌町役場



大槌町役場仮庁舎前





業務自体は、最初の2日半で地域保健の全体像、実際に進行している事業、どういう部分をサポートする必要があるのか、自分に何ができるかということをおおまかに把握できましたので、今後1か月間、ここでやっていけるという手ごたえを感じる事ができました。

業務に関しては、限られた時間の中で通常の保健事業が軌道に乗るよう、陰ながらお手伝いさせていただくというスタンスで臨めたのもよかったのかもしれない。

私が職員の皆さんと接して感じたことは、震災後、4月末に開庁して以来、ずっと走り続けてきた



せいか、今の方が辛いと訴える方が多く、ミスに誰も気付かなかったり、忘れっぽくなっていたり、集中力が落ちていたり、抑うつな気分や不眠を呈している方が多くおられた点です。

派遣期間中、時折、職員さんが同じ課のメンバーには話せないということで、相談に来る方もいました。仕事をしながら、町民のみならず、職員さんのフォローもこれからの課題ではないかなと強く実感しました。

滞在先については、被災したホテルで余震も続く状況であったことから、力を抜いているつもりでも、軽く緊張が続いた状態で、慣れるまでに時間がかかりました。

週末は、派遣前、先輩派遣者から「元気に任務を全うするために、休日に内陸へ出かけるのが大切」というアドバイスを受けていましたから、なるべく出かけるようにして過ごすことにしました。

週末のうち一日は被災地をゆっくりと歩いて回ったのですが、テレビでは伝わってこなかったものが五感を通して強く伝わってきました。

津波が来る瞬間までそこにあったいつもの時間が、瞬時に消えてしまった様子が手に取るように分かる建物がまだ多く残っており、その空気感は何ともいえないものでした。

解体を待つ建物の前には旗が立てられており、その旗があちこちで靡く様子や遺体が発見された場所を示す赤い×印が記された建物があちこちに立ち並んでおり、その光景は何とも異様でした。

町を歩きながら、涙が自然と溢れだしたこともありました。



このように、切ない気持ちで一杯となって、週末は少し気持ちが沈む時もありましたが、職場に行くと決まって強い気持ちが身体から溢れてきて、今日もしっかりがんばろうという気持ちになりました。

それは、一緒に働いた仲間から、生きていく上で大切なことや生きる大きな力を感じたためです。

命の別れ際に関わった方、津波にのまれた方、大事な人を亡くされた方、家を流された方など、みんなそれぞれ本当に辛い経験をされているのにも関わらず、前を見て一步一步しっかりと歩いておられたのです。

その力は、人と人とのしっかりとした繋がりがあからこそだと感じましたし、その繋がりの中には、相手を思いやる気持ちがたくさん溢れていると感じました。

ある時、地元の住職さんが「今必要なのは物ではなく心」と仰っていましたが、まさにそうだなと思ったものです。

ただ、その想いも独りよがりになってしまっは力を発揮できません。被災地支援にお



いて、自分の持っている力を発揮することが大前提ですが、何よりも“協調”してやっていくことが一番大切なのではないかと思います。

今回、自分自身と深く向き合うことができ、生き方や人生観が変わる大きな経験をさせていただきました。

派遣を終えて振り返ってみると、本当に学ぶことが多い派遣だったと思います。

学んだ経験は、今後、仕事に、そして自分自身に生かし続けて行きます。

最後に、私が無事に仕事を全うできたのは、私個人の力ではなく、多くの方のご支援の賜物だったと強く感じています。

派遣に際し温かいご支援を頂けたこと、貴重な経験の機会を与えて頂いたこと、この場をお借りして深く感謝します。



| |
|--------------------------------|
| 現地からの職員レポート (現地での生活状況を報告したメール) |
|--------------------------------|

| |
|-----------------------|
| 総務部 勝川 美和 (任務：保健業務支援) |
|-----------------------|

(2011/10/06 勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会)

お疲れ様です。

大槌町派遣中の勝川です。

昨日無意識に国際線カウンターに並ぶといった恥ずかしいエピソードもありましたが、無事に岩手県に到着しました。

皆さんからたくさんのお気持ちを頂き、感謝しております。ありがとうございます。

封筒に同封されていましたが皆さんの名前の紙は手帳に挟んで持参しました。

今回派遣が決まりバタバタと時間が過ぎていきましたが、そんな中、いつも以上にみなさんのあったかい気持ちに触れることができ、感動ものにはかなり涙もろい私の涙腺は毎日ウルウルでした。

一人でこちらに来ましたが、職員課の皆さんをはじめ、たくさんの方に支えられている気持ちが大きく、一人でありながら一人でない気がしています。

大槌町に来てからも広域連合の方をはじめ、箕面市から派遣中の西田さんや大阪の市町村から派遣されている職員さんにかかなり気にかけてもらい面倒をみてもらっています。

人に恵まれているなあとほんと感謝感謝です。

今回派遣の話聞いた時、直感で迷わず行こうって思いました。

即戦力を求められるであろう場所で、未経験の仕事というところは気になりましたが、こういう機会に恵まれたってことは何かお役に立てれることがあるんだろうし、何か今後の産業保健に活用できたり、自分自身の成長に繋がるのではないかと思い、出発まで気持ちがぶれることはありませんでした。

まだ右も左も分からなく、何ができるのかまだ初日の昨日は見えては来ず、

(そりゃそうですよね) 慣れない環境に疲れはいつも以上でしたが、気持ちをニュートラルに自分らしさを発揮できたらと思っています。

不在中は皆さんに多大なご負担とご迷惑をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいいたします。

追伸：ご用意頂いたホテルなどの環境は思った以上に良いです。

また大槌町派遣中に使用できるよう、フリーアドレスを取得しました。

(2011/10/13 勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会)

おはようございます。

みなさまお疲れ様です。

大槌町に派遣中の勝川です。

岩手入りして1週間が経ちました。

日に日に生活や仕事に慣れていく感覚を体感しています。

初日は浅い睡眠でしたが、今では大きめの余震にさえ気づかないほど、ぐっすりと眠っています。

意外に鈍感だったのか？と思っている今日この頃です。

食欲も全く落ちることなく、3食しっかり食べていますし、(時には間食も・・・) 元気にやっています。

滞在ホテルは釜石にあるのですが、毎日釜石の市内をボランティアさんが清掃されたり、解体されたりしていて、日々変化していていることもあり、また信号も少しずつ増えていっているようで、岩手に来る前に想像していたよりも全然ストレスなく生活ができています。

ホテルライフですが、一昨日お部屋のお引っ越しがありました。

バス・トイレなしの大きなお部屋からバス・トイレなしの小さなお部屋への移動のはずが、ドアを開けるとバス・トイレ付の小さなお部屋だったんです。備品もグレードアップしていて。

ホテルの方のミスということで、料金は事前に言っていた料金で月末まで、バス・トイレ付のお部屋を使わせて頂けることになりました。ツイテいます。

物理的な面もそうですが、西田さんや堺市の職員さんにとっても気にかけて頂いていて、ホームシックにかかることなくいけています。いろんな意味で恵まれています。

こうやってここで滅多にできない経験をさせてもらっているのもやはり職員課の皆さんに助けてもらっているおかげなので、皆さんにもとても感謝しています。

ありがとうございます。そしてご迷惑をおかけして申し訳ありません。

日常、こんなに感謝することが溢れているんだなって、ここにきてとても実感しています。生きているだけでもありがたいなって思います。

さて仕事ですが、町の保健師さんたちは課内で仕事をしていることが多く、今現在私が受けている印象は、一旦ストップしていた保健事業を再構築していく部分に力が注がれているということです。

全ての書類が流されたことで1からやらなければいけないこと、健康推進班としての保健師経験が浅い方が半数（4人中2人）なので、いろんなことに時間をとられてしまっている感じです。

また仮庁舎ができ半年が経ち、今の方が皆さん疲れを実感しているようで、全体的に能率が下がっているような印象があります。小さなミスも連発している状態ですが、回覧中にチェックされることなく流れていっている状況です。

班の状況を見ていて、今現在は豊富な知識や経験よりも、町保健師さんのペースや雰囲気乱さず、そっと自然と支えることが一番求められているのかなと感じます。

健康推進班が管轄している仕事は全く従事したことのない分野でしたので、果たして役に立つのかなと思っていましたが、対象者と扱う法律が違うだけで、仕事の基本的な部分是一緒なので、今のところ困惑することなくできています。

箕面でこれまでやってきた様々なことがとっても役に立っています。

この5日間で、班の状況がつかめ、求められる仕事の成果のラインのような部分があったことで、だんだん力を抜いて仕事ができるようになってきています。

長々と書いてしまいましたが、こんな感じに暮らしています。

ちなみに、福祉課のもう一つの班に栗東市から派遣されてきている職員さんがいるのですが、よく栗東市から電話が入っています。

電話は何台もありますので、福祉課直通で電話をかけてもらうことは全然問題なさそうですので、何かありましたらいつでもお電話いただけたらと思います。

こちらでも朝晩は冷え込みます。

大阪でも一昨日は寒くなったと聞きました。

皆さんどうぞお体を大切になさってください。

(2011/10/19 勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会)

お疲れ様です。

勝川です。

こちらではだいぶ秋が深まってきていますが、箕面はどうでしょうか？

いろいろ仕事面ではご迷惑をおかけして申し訳ありません。そしてありがとうございます。

早いもので、ついこの間来たばかりとと思っていましたが、もう帰る日が近づいてきました。カウントダウンが始まると少し寂しい気持ちにもなっています。

この週末再びゆっくり釜石の町を歩いてみたのですが、ここに来た当初には営業していなかったお店がちらほらと再開していたり、信号機が増えたり、パナマ船の撤去作業が始まっていたりと、少しずつ復興しているなど感じています。

す。

この週末ホテルの近くにトレーディングカードのお店が再開したんですが、外から中をのぞくとすごく賑わっていました。たまたま親子連れが嬉しそうな顔でそのお店に入る姿を見かけ、私まで嬉しい気持ちになっていました。

ホテルライフですが、来てすぐに仲良くなったチーム岐阜（←勝手に命名）の保健師さんといろいろ情報交換をしたりしていて、寮生活のような感覚で過ごしています。

そう言えば週末の雨で少しお部屋が雨漏りしました。地震の影響なのかもしれません。

今過ごしている部屋は6階のため、震度1の余震でも震度1以上ありそうな感じがします。昨日の朝は、久々余震に気づき目覚めました。

さて今週に入り、さらに生活にも仕事にも慣れてきました。

少し忙しくなってきたのですが、町の保健師さんと一緒に元気に仕事をしています。

今現在、主にどんな仕事をしているかといいますと、インフルエンザ予防接種に関することです。

町民向けのインフルエンザ予防啓発の資料作成（健康相談や健康教室で使用）、医療機関へのインフルエンザ予防接種事業の説明書の作成、インフルエンザ予防接種に関する案内A4で4枚分ほど（広報誌に挟み、全戸配布）の作成、その他関係資料の作成などを行っています。

これらは全部、保健師たちで印刷をして仕分けまでしなければなりません。

10月20日発行の全戸配布の資料は、医師会や関係機関とのやりとりを経て、昨日ようやく原稿が完成しました。箕面のように町民さんへ出す資料をチェックする部署はありませんので、班のみんなのチェックのみで印刷にかけます。

少しドキドキです。

自分が作成したものが、大槌町の全家庭に配布されると思うと、ちょっと感慨深いものがあります。

近隣市町村は既にインフルエンザの予防接種がはじまっていますので、大槌町はちょっと出だしが遅れましたが、20日の広報には間に合いそうなのでホ

ッとしています。

今回の震災でストップしていた事業の影響が町民にでてきているようで、少しでも早く各事業が軌道に乗るようお手伝いできたらなと思っています。

毎日毎日、素敵な仲間と貴重な経験をさせて貰っているのも、皆様のご理解とご協力があるからだと思っています。

ありがとうございます。

ここで感じたことなど、また帰ってからゆっくりお話させてもらい、共有できたらいいなと思っています。

(2011/10/26 勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会)

おはようございます。

みなさまお疲れ様です。

大槌町派遣中の勝川です。

ついこの間岩手に来たばかりだと思っていたのですが、あっという間に残りの勤務日数が5日をきってしまいました。

昨日の帰宅時、2回目のバスでの帰宅でしたが、停留所を間違えて一つ前で降りてしまい、被災地のど真ん中を歩いて帰りました。

懐中電灯は持っていて、町の明かりも少しずつ増えてきているので、大槌のように真っ黒（真っ暗より暗いイメージ）ではありませんが、昼に歩く感覚とは各段に違いました。

以下、またこの1週間の様子を書いてみましたので、お時間がある時に読んで頂けたらと思います。

<生活編>

生活にはすっかり慣れたというより、自宅にいるかのような気分時々なっています。

ホテル内での知り合いもまた増え、さらに毎日が充実しています。

そういえばホテルにいるといろいろな音がします。

釜石駅が近いため、JRの何とも言えない寂しそうな汽笛。(この音を聞いた
びになぜか、砂の器が頭に浮かびます。)

鳥の鳴き声。

エレベーターの音などホテル内の生活音。

そして「キー」という鳴き声。先日やっと「キー」という鳴き声の正体がわ
かりました。

それは“野生の鹿”でした。なんとホテルの前に流れている川に鹿が来てい
たんです。

びっくりしました。

ホテルの方に聞くと、「鹿、来るんですよ。後はウサギも来ることがあります。」
と。

思わず「熊はないですね？」と聞くと、

「(このホテルの避難先の) 小学校に上がっていく道に熊のふんがあったような
ので、近くの山にはいるようです。」と笑顔であっさり言われました。

私は結構ビビり者なのですが、「へえ~熊も出るんだあ。」と心で淡々と思っ
ている自分に驚きました。

岩手に来て、確実に大阪で暮らしている時の自分の感覚と違うなと良く感じ
ます。

こっちに来て、“あっこれが軸” だって分かる感覚が増していて、仕事をして
いる時はもちろん、余震があるなどなにかあった時にもいつもその軸にどっし
りという感覚があります。

ここに来て、人生観というか、生きる意味というか、生き方というか、そう
いったものが確実に変わったなと感じています。

大阪に帰ってもこのままこの感覚を持ち続けたいと思う今日この頃です。

さて前置きが長くなりましたが、ここ最近の仕事状況について報告したいと
思います。

<仕事編>

先週末は人生初の3歳児健診に挑みました。

前日に当日の役割分担の発表があったのですが、保健師の数が私を入れて5名（うち1名新人さん）のため、みんなみっちり役割が与えられました。

健診前夜は健増の方からの情報やホテルマルエ滞在中のチーム岐阜の保健師さんに本をお借りし、3歳児の保健指導のポイントを勉強しました。

当日、町の保健師さんがやっている姿を見学するなんていう時間的余裕もなく、ぶっつけ本番で一夜漬けの知識を頼りに、自分なりのやり方で実施しました。

なんとか無事に終えることができました。

奮闘ぶりを班長さんが写真におさめてくださったので、また帰阪したら披露したいと思います。

昨日はこれまた人生初のポリオの予防接種に従事しました。

当初4月にポリオの予防接種が実施される予定だったのですが、震災の影響で実施できなかったため、予想をはるかに超えた受診者数でした。

親御さんからの質問も、答えられるものばかりで、無事終わりました。

（後一回ありますが。。）

今はインフルエンザの予防接種を通知したばかりなので、問い合わせが殺到しています。

福祉課全体の電話の鳴りようは職員課の電話の鳴りようを超えています、ここ数日はさらに増すことが予想されています。

町外や避難先で受ける高齢者にはいろいろ手続きが必要で、もう一人の保健師さんと今、その対応に追われています。

次の派遣の方にバトンタッチするまでには落ち着き、他に任されている仕事をやり遂げたいなと思っている所です。

職員さんのメンタルはやはり気になりますが、1カ月でできることは限られているので、先週末、仕事の後にお疲れの班長さんと中堅保健師さんたちと5人で一緒にアートワークをやりました。

作品として出来上がったアートがこれから先何かの支えになればいいなと願って。。

さて以下はこの1週間に感じたことです。

<感じたこと編>

この1週間は親子、地元の先生（お医者さん）と接する機会がありましたが、印象的な場面がありました。

「先生に会えただけで、それだけで元気です」と子どもをもつお母さんがおっしゃって、先生もニコニコ笑顔でその言葉にこたえている場面であるとか、何人もの方が先生に満面の笑みで話しかけてそれに笑顔で答える先生の場面など。

そんな雰囲気を見ていて、この町にこの先生たちがいてくれることがみんなの安心に繋がっているのだろうなって感じ、人間と人間が繋がりがあって支え合っている町だなと改めて感じました。

住職さんが先日おっしゃっていました。

まだ支援物資が不足していて、おにぎりを分け合って食べないといけなかった時、みんなが大きい方を相手に渡しているのを見て、絶対立ち上がっていけないと思ったと。

今回健診などの様子を見ていて、この町の人たちの底力はすごく、住職さんと同じようなことを感じました。

ここに来て、学ばせてもらっていることの方が多いなと感じています。

これまでよく「生きているのではなく、生かされている」ということを耳にしていたのですが、分かるようで分からないでいました。

それが大槌町で働いてみてこういうことかと分かった感じがありました。

さてごろっと話は変わりますが、

毎週1回は釜石市内をゆっくり歩いて回っているんですが、少しずつ解体も始まり、パナマ船の撤去も進み、一步一步進んでいっています。

歩いて回っている時に岸壁の一番被害がひどかった場所で、一人電気工事をされている方を見かけました。なぜかその方を見た時にふと足を止めてじっと眺めていたんです。

普段だったら、工事をしているんだなって思って何も感じないんですが、その時その人の背中を見ながら、仕事には小さいも大きいもなく、小さい大きいを区分けしているのも他でもない自分で、自分ができることを着実にやるのが一番大事なんだなって思いました。

日常、たくさんの気づきやきらめきがあるんだなとここに来て実感しています。

それに気づくか気付かないか、どう捉えるか、全て自分次第ですね。

大槌に来る機会に恵まれて、本当に感謝しています。

送り出して頂いてありがとうございます。

ご協力頂いてありがとうございます。

箕面の仕事の面ではみなさんにかなりご迷惑をおかけしているようで申し訳ないです。

本日、甘〜いものがみなさんのお手元に届くかなと思います。お疲れを少しでも癒して頂けたらと思います。(岩手のもので、私のお気に入りの一品です。)

大槌の職員さんが、こうおっしゃっていました。

「送り出す側の職員さんも職員さんを危険な場所に行かせるという不安があるだろうし、職員を一人派遣することで、仕事の負担も増えるだろうし、本当に来てもらえることだけでもありがたいです。最初は土地勘のない人に来てもらうことはどうかなと思っていたけど、来てもらって本当に助かっています。」と。

みなさんに感謝されていた気持ちをこの場を借りて、伝えさせてもらいます。

さて、長々と書きましたが、こんな感じに今週は暮らしていました。

これで岩手から送る報告も最後になるかなと思います。

最後までお読みいただきありがとうございます。

それでは今日の日もみなさんにとって素敵な一日となりますように。

派遣報告書

健康福祉部 西村 智美 (任務：保健業務支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 12 月 1 日～平成 23 年 12 月 28 日

1. 大槌町の概要

上閉伊郡大槌町は岩手県沿岸部にある面積約 200 平方キロメートルの東西に長い町です。西の北上山地から大槌湾へは大槌川と小槌川という 2 つの川が注ぎ、三陸鉄道や国道 45 号線など主要道路をはじめ町の中心は沿岸部に集中していました。主な産業は水産業で、定置網による漁業や牡蠣の養殖、水産食料品の製造業も盛んでした。農業従事者は少ないですが、西側山地の山菜やきのこ類は品評会で賞を取るなど山の幸にも恵まれた自然豊かな町でした。

東日本大震災以前の人口は約 1 万 5 千人、年間出生数約 100 人で、65 歳以上人口は 32.4%と岩手県平均 27.2%を上回っていました(平成 22 年国勢調査による)。震災後は、平成 23 年 11 月 30 日現在で 13,404 人と、震災前に比べて約 2,600 人減少(16.2%減)しています。これらは亡くなられたり行方不明になったりされたかただけではなく、震災後、町外へ流出されるかたが多くなっているとのこと(平成 24 年 2 月 1 日では 12,463 人)。



岩手県上閉伊郡大槌町
 -----隣接自治体-----
 北：下閉伊郡山田町
 北東：宮古市
 西：遠野市
 南：釜石市

- 釜石市へ働きに行く人も多く、朝は釜石市方面、夕方は大槌町方面へ通勤ラッシュがあります。
- コンビニエンスストアやスーパーはありましたが、ファーストフードやドーナツ店などのお店はなく、若い世代の人は宮古市や盛岡市へ買い物に行くのが楽しみだったそうです。

2. 東日本大震災による被災と復旧状況

<東日本大震災と津波の状況>

発生日時：平成23年3月11日（金）14時46分頃

規模：マグニチュード9.0(モーメントマグニチュード)

周辺の震度：震度6弱（釜石市）

津波浸水高：町役場付近10.7m、吉里吉里16.1m、吉里吉里漁港東側22.2m、赤浜12.9m、新港町12.7m、波板（津波遡上高）19.1m（資料：国土地理院）

痕跡高最大：安渡13.7m（資料：岩手県県土整備部河川課）

浸水面積：4平方キロメートル（住宅地・市街地面積の52%）（資料：国土地理院）

<大槌町の被災・復旧状況>

人的被害：1,256人（死亡者802人 行方不明者505人）で、町の人口の7.8%である。津波による被害のほか、町中心部で発生した火災による被害の影響もある。（平成23年11月30日現在）

家屋被害：3,878棟（全壊・半壊3,717棟、一部損壊161棟）で、全家屋の59.6%である（平成23年9月28日現在）。公共施設や産業の物的な被害総額は約768億円。

避難状況：城山公園体育館の避難者数1,128人。当日の他の避難所状況は集計不能。避難所・避難者数は3月16日に最大で38箇所6,173人にのぼる。やがて仮設住宅への移転が進み、8月11日に全ての避難所が閉鎖された。

仮設住宅：4月29日に最初の応急仮設住宅が完成し、順次建設が進んで48団地2,106戸が完成。入居世帯数2,080世帯、入居者総数4,769人（平成23年11月30日現在）。冬季に水道管がたびたび凍るなどの支障があった。

支援状況：①警察や緊急消防援助隊等により、震災当日から生存者救出、行方不明者捜索活動が行われた。自衛隊は3月12日～7月24日まで、復旧・生活支援、防疫活動を行った。全国の警察や消防からは、救出・捜索活動のほか、治安維持や拾得物返還などの支

援活動が行われた。

②ボランティアは3,518団体、49,029人にのぼり、被害住宅の泥出し、炊き出し、イベント運営、避難所や仮設団地での支援などが続けられている。(資料：大槌町社会福祉協議会 復興支援ボランティアセンター 11月30日現在)

※「大槌町東日本大震災津波復興計画（基本計画）」を基に作成

3. 大槌町役場の状況

＜大槌町役場の状況＞

町役場では、地震の後すぐに災害対策本部を立ち上げるため、町長はじめ幹部職員のかた達が庁舎2階へ集合されたそうです。しかし、庁舎は津波に襲われ、課長級のほとんどのかたが亡くなられたそうです。町長のご遺体も数日後発見されました。

他の役場職員は近くの高台にある中央公民館、城山公園体育館へ避難

し、そこに避難された町民の救護等を行いました。職員の中には、家族の安否もわからないまま仕事を続け、家に2週間帰れなかったかたもいらっしゃいました。

大槌町役場はそのままで、献花台が立てられていました。

大槌町役場は旧大槌小学校の校庭に建設されたプレハブ（4月9日完成）へ移転しました。将来的には隣接する旧大槌小学校を改修して移転する予定です。

旧大槌町役場



(左) 役場のプレハブ（手前）と旧大槌小学校（奥）
(下) 旧大槌小学校の正面（火災の跡あり）



- ・震災で町長が亡くなられた後は総務部長が兼任されていましたが、8月末に町長選挙が行われ、碓川豊町長が誕生し、副町長3人体制で11月1日から部局制になりました。
- ・新町長のもと、復興計画作成に向けて各地域協議会の意見を受け、12月末に基本計画が作成されました。
- ・役場職員は、40人近くが死亡や行方不明で書類等も津波で流されたため、岩手県や国をはじめ、全国の自治体からの派遣された職員が多いです。震災後9か月経っても、通常業務はなかなかできない状況でした。
- ・役場から町民へのお知らせは「広報おおつち」、町外に避難している人はモバイルメールでの案内でしたが、復興用の仮ホームページは重要な点のみ掲載していたため、町外避難の人からの電話問い合わせが多かったです。正式に町のホームページができたのは平成24年1月からで、以前に比べて情報量が多くなっています。

<役場の設備>

- ・役場は警察や消防と同じプレハブで、棟の間に屋根があり、下には砂利が敷かれています。
- ・申請手続きなどの窓口は各課にありますが、狭いため、2～3人来客があるといっぱいになります。また、物を置くスペースがほとんどなく、支援物資はあらかじめ電話確認されてから受けていました。
- ・水道設備はなく、水は給水タンクに給水車が補給します。職員の飲料水は各自で持参するか、役場外の自動販売機を利用します。
- ・プレハブから離れた場所に仮設トイレがあり、手洗い場には屋根もシンクもありません。
- ・12月中旬に手洗いの簡易式水道が度々凍ったため、シャワー室の外にある水道を使用。
(このとき役場内で利用できる蛇口は1箇所のみでした) 12月末に水道管工事着手。





- ・ 役場の周辺はほとんどの建物が流されて何もなかったため、夜は真っ暗になります。瓦礫や釘などがあって危険な箇所もあるため、懐中電灯を持って歩きます。
- ・ 電話やパソコン、車などは寄付で充実していますが、紙類や文具が少ないため、節約されていました。
- ・ 昼食は役場近くの復興食堂（仮設店舗）でお弁当を注文できます。
- ・ 福祉課のプレハブ内は寒く、室内でも手袋を使用していましたが、12月9日に庁舎内で引越しがあり、新しいプレハブへ移動してからは寒さがましになりました。福祉課（福祉班・健康推進班・介護班・包括支援センター班）は4班1つの棟になり、町民課向かいの建物へ移ったため、町民のかたへの案内もスムーズになりました。

4. 町の状況

- ・ 小・中学校の仮設校舎での授業は9月から開始しました。スクールバスもあります。
- ・ 被災した県立大槌病院や町内の医療機関は、プレハブの仮設診療所で診療されていました。
- ・ 町民の買物は生活協同組合の宅配やスーパーの移動販売、コンビニエンスストアなどを利用していましたが、11月に旧大槌北小学校の校庭にプレハブ店

舗（約 50 店舗分）が並び、賑うようになりました。こちらは水洗トイレがあります。また、12月22日に町民待望の大型複合店舗「シーサイドタウンマスト」が開業し、クリスマスや年末年始の買物に大勢の人が来店して駐車場が混雑していました。



役場近くにある「シーサイドタウンマスト」

5. 派遣業務について

<所属課の体制>

派遣先は民生部福祉課健康推進班で、福祉課には健康推進班、福祉班、介護班、包括支援センター班の4班が含まれます。健康推進班のスタッフは8人で、班長（管理栄養士）、主任主査（保健師）の他、管理栄養士1人、保健師5人（派遣を含めた数）、非常勤事務1人です。

<健康推進班の12月の業務>

（1）成人保健関連

①特定健診、後期高齢者健診、被災者健診（※）、肺がん・前立腺がん・肝炎ウイルス検診

12月8日～22日（町内11箇所の会場で、出張で行う健診。土日を含めて連続で15日間実施。）受診者数2,227人。

町民課の国保年金班、福祉課の健康推進班、包括支援センター班が出務。会場設置や問診、1月に行う大腸がん検診の容器配布を実施。検査（検診車2台ほか）やアンケート確認は岩手県予防医学協会、歯科健診は岩手医科大学が実施。

※被災者健診：18歳以上を対象に、岩手医科大学による被災者の健康状態の調査を兼ねた健診。健診会場で同意いただける方は、今後5年間健診を受診できる。国保以外も含まれ、全町民が対象。今年度受けな

いかたでも、同意を得られれば今後の健診を受けられる。

- ②各地区健康教育：高血圧予防の食事について、栄養士とさわやかウォーキングの会（ボランティア）が実施。

(2) 母子保健関連

BCG・4か月児相談（6人／対象者7人）、7か月児相談（3人／対象者7人）、12か月児相談（8人／対象者19人）、3歳児健診（15人／対象者21人）

(3) その他

復興計画の基本計画作成、予算案提出。

表1 大槌町の特定健診・後期高齢者健診・被災者健診の受診者数

| 日付 | 曜日 | 午前会場（9:30～） | 午後会場（13:00～） | 受診者数(人) |
|-----------|----|-------------|--------------|---------|
| 12月8日 | 木 | 桜木町保健福祉会館 | 桜木町保健福祉会館 | 220 |
| 12月9日 | 金 | 寺野弓道場 | 寺野弓道場 | 209 |
| 12月10日 | 土 | 寺野弓道場 | 寺野弓道場 | 149 |
| 12月11日 | 日 | 中央公民館 | 中央公民館 | 131 |
| 12月12日 | 月 | 中央公民館 | 中央公民館 | 151 |
| 12月13日 | 火 | 長井清流館 | 小槌多目的集会所 | 91 |
| 12月14日 | 水 | 旧吉里吉里中学校体育館 | 旧吉里吉里中学校体育館 | 173 |
| 12月15日 | 木 | 旧吉里吉里中学校体育館 | 旧吉里吉里中学校体育館 | 122 |
| 12月16日 | 金 | 浪板交流促進センター | 浪板交流促進センター | 106 |
| 12月17日 | 土 | 赤浜小学校体育館 | 赤浜小学校体育館 | 123 |
| 12月18日 | 日 | 中央公民館 | 中央公民館 | 190 |
| 12月19日 | 月 | 大ヶ口多目的集会所 | 大ヶ口多目的集会所 | 228 |
| 12月20日 | 火 | かみよ稲穂館 | かみよ稲穂館 | 143 |
| 12月21日 | 水 | かみよ稲穂館 | かみよ稲穂館 | 91 |
| 12月22日 | 木 | 金沢小学校体育館 | 金沢小学校体育館 | 100 |
| 受診者数合計（人） | | | | 2227 |

< 従事した業務 >

(1) 成人保健

- ①健診（特定健診、後期高齢者健診、被災者健診、肺がん・前立腺がん・肝炎ウイルス検診）出務。土日を除いた11日間、町内10会場へ出務。会場設営、問診を担当。喀痰容器と大腸がん検診（1月実施）の容器も配布。



町民のかたは1～2時間も前から並びに来られます。役場のかたはそれより早くに現地に到着し、暖房をつけて準備されていました。



検診車を2台配置します。この日は雪が積もっていました。



長井清流館。どの会場もこのような配置で準備します。慣れてきました。



金沢小学校体育館で問診の準備です。この日は雪が降り、一番寒かったです。お腹と背中と足の裏にカイロを貼っています。

②予防接種に関する業務

- ・インフルエンザ、ヒブワクチン、肺炎球菌ワクチン、子宮頸がんワクチンなどの問い合わせや書類発送、電算入力などの事務。

③特定健診、がん検診等の準備

- ・配布文書や会場に貼付する案内、腹部エコー・大腸がん検診の流れ（案）を作成。
- ・乳がん・子宮がん・大腸がんのクーポン券を発送。

(2)母子保健

- ・12か月児健康相談。
- ・3歳児健診：計測（身長・体重・頭囲・胸囲）と個別保健指導。

(3) その他、電話や窓口対応など。

- ・時期的に、インフルエンザ、特定健診、大腸がん検診等の問い合わせが多い。



役場から車で5分のところにある仮設の保健センターです。母子保健事業はここで行います。



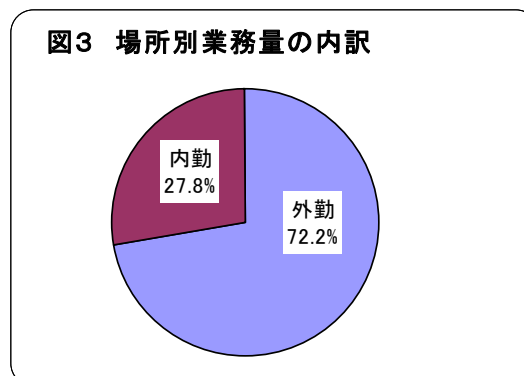
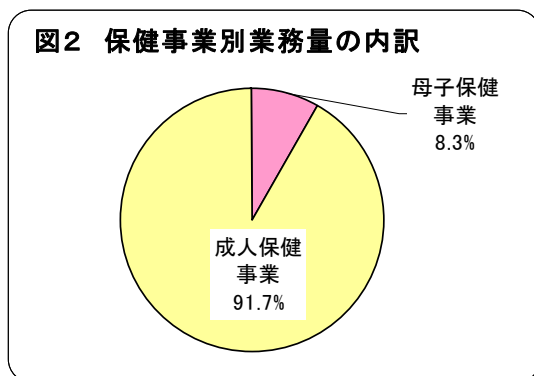
3歳児健診の計測
保健指導も担当しました。

12月は特定健診等が中心業務で、早朝出勤して町の保健師さんと会場へ行き、役場に帰るのが16:30過ぎになることが多かったです。ほとんど外勤業務でした。町の保健師さん達は通常業務に加えて復興計画や予算案の作成で忙しく、夜遅くまで残業されていました。派遣は内勤のときは電話・窓口対応・事務作業が中心となり、他の課や班へ電話をつなぐことも多かったです。

表2 従事した業務の日程表

| 日付 | 曜日 | 午前 | 午後 |
|-------|----|----------------------|-------------------------|
| 12月1日 | 木 | 移動(大阪空港→花巻空港→ホテル→役場) | 辞令交付、インフルエンザ予防接種の書類送付 |
| 12月2日 | 金 | 3歳児健康診査準備(仮設保健センター) | 3歳児健康診査(仮設保健センター)/健診打合せ |
| 12月3日 | 土 | | |
| 12月4日 | 日 | | |
| 12月5日 | 月 | インフルエンザ予防接種の書類送付 | 大腸がん検診受診勧奨チラシ作成、電話対応 |
| 12月6日 | 火 | 予防接種の接種歴入力、電話・窓口対応 | 12か月児相談(仮設保健センター) |
| 12月7日 | 水 | 特定健診会場の案内作 | 特定健診会場準備(桜木町保健福祉会館) |

| | | | |
|--------|---|--------------------|---------------------------|
| | | 成、電話・窓口対応 | |
| 12月8日 | 木 | 特定健診(桜木町保健福祉会館) | 特定健診(桜木町保健福祉会館) |
| 12月9日 | 金 | 特定健診(寺野弓道場) | 特定健診(寺野弓道場) |
| 12月10日 | 土 | | |
| 12月11日 | 日 | | |
| 12月12日 | 月 | 特定健診(中央公民館) | 特定健診(中央公民館) |
| 12月13日 | 火 | 特定健診(長井清流館) | 特定健診(小鍬多目的集会所) |
| 12月14日 | 水 | 特定健診(旧吉里吉里中学校体育館) | 特定健診(旧吉里吉里中学校体育館) |
| 12月15日 | 木 | 特定健診(旧吉里吉里中学校体育館) | 特定健診(旧吉里吉里中学校体育館) |
| 12月16日 | 金 | 特定健診(浪板交流促進センター) | 特定健診(浪板交流促進センター) /クーポン券発送 |
| 12月17日 | 土 | | |
| 12月18日 | 日 | | |
| 12月19日 | 月 | 特定健診(大ヶ口多目的集会所) | 特定健診(大ヶ口多目的集会所) |
| 12月20日 | 火 | 特定健診(かみよ稲穂館) | 特定健診(かみよ稲穂館) |
| 12月21日 | 水 | 特定健診(かみよ稲穂館) | 特定健診(かみよ稲穂館) |
| 12月22日 | 木 | 特定健診(金沢小学校体育館) | 特定健診(金沢小学校体育館) |
| 12月23日 | 金 | | |
| 12月24日 | 土 | | |
| 12月25日 | 日 | | |
| 12月26日 | 月 | 電話・窓口対応、検体回収、容器配布 | 検診の流れ(案)作成、検体回収、容器配布 |
| 12月27日 | 火 | 検診会場貼紙作成、検体回収、容器配布 | 検診対象者名簿管理、検体回収、容器配布 |
| 12月28日 | 水 | 検診準備(記入例作成)、引継ぎ書作成 | 移動(釜石→花巻→花巻空港→大阪空港) |



12月は前月に続いて高齢者インフルエンザ予防接種の助成期間であり、前半はその問い合わせや書類送付に関する業務が多かったです。また、8日から特定健診等が始まり、この月の業務の大半を占めました。したがって、保健事業別の業務量では、成人保健事業が9割以上となりました(91.7%、図2)。場所別では、健診出務のために役場外で1日勤務していることが多く(72.2%)、役場内の仕事は4分の1程度(27.8%)でした(図3)。1月には腹部エコー・大腸がん検診、乳がん・子宮がん検診が始まるため、がん検診クーポン券の発送や案内作成等の準備も行いました。

地元保健師のように家庭訪問を担当することはなかったのですが、電話や窓口対応、健診業務などの外勤業務をこなすことで、地元保健師の活動がスムーズに行えるよう、派遣保健師としての役目を果たせたと思います。また、特定健診等に出務したことで、町内10か所の拠点となる集会所や周辺地域の状況を知ることができました。更に、健診で1,634人(受診者総数は2,227人)の町民のかたに接するという貴重な機会が得られました。

6. 被災地支援を通しての感想

派遣の時期は震災から9か月経ち、復興計画を作成している段階だったので、復興に向けて町が変わっていく様子を見ることができると感じていました。

最初に見た町の様子は、「思っていたよりも瓦礫が整理されている」という印象でした。でも、それはテレビで被災地を見ていた時の視点でした。生活してみると不便なことが多く、建物の多くは放置されたままなので、計画に掲げている8年で本当に復興の目途がつくのか、今後の生活がどうなるのか、町民のかたの不安はいっぱいでした。また、週に数回身体に感じる程度の地震も起こ

っていたので、水分や食料品などを常に携帯する癖がつきました。震災はまだそこにあるという感じでした。

業務では、出張型の健診で多くの町民のかたにお会いできて良かったです。各健診会場は避難所にもなった場所だったので、受診に来られたかた達が震災のときの苦労話やお互い無事で良かった事などを話され、再会を喜ばれていました。また、地元の保健師さんは町民のかたを家族ぐるみで把握されており、声を掛け合っておられました。

大槌町の町民のかたや保健師さん達には、「忍耐強さ」と「優しさ」を学ばせていただきました。健診に早くから来られてじっと待っておられる姿や、ありのままの状況を受け入れ、お話される様子から、大槌町の人々の強さを感じました。また、「大丈夫です。何とかあります。」という保健師の言葉。それは、この震災を経験し、町民を支えてこられた保健師ならではの力強い言葉でした。しかし、復興への道のりは長く、忍耐強さの中にはご本人が気づかなくて無理をされている場合もあるので、「いつもと違う」というサインを逃さず、周囲の人が傾聴して専門家へつなぐことも今後の課題となります。

1か月という期間は、派遣に行く側にとっては調整するのに大変な期間ですが、現地ではあっという間の短さでした。その土地の風土や生活などが少しわかってきた時に終了するので、保健師活動という住民生活に密接な業務を考えると、何もできない感じです。しかしながら、地元の保健師さんが町の重要な施策に主体となって関われるような「派遣」としての役割は、どこでも同じで、応用できるものだと思います。

今後は箕面市の防災や保健師活動においてもこの学びが活かされるようにしていきたいと思います。今回、皆様に派遣の機会をいただいたこと、支えてくださったことに大変感謝しています。ありがとうございました。

職員レポート（平成 24 年 3 月 11 日タッキー816 インタビュー用）

健康福祉部 西村 智美 （任務：保健業務支援）

【編者注】

※箕面マーケットパークヴィソラにおいて開催された東日本大震災復興支援募金活動・チャリティーコンサートにおいて行われたタッキー816の公開生放送に、被災地支援に派遣された箕面市の職員4名が出演。以下は、インタビューのためにまとめられた原稿。

<報告>

健康福祉部健康増進課保健師の西村です。市民のかたの健康増進を目的に、乳幼児健診や育児相談、成人の健康教室・健康相談、家庭訪問などを行っています。

私が派遣された岩手県上閉伊郡大槌町は、震災前は人口約15,000人の町でしたが、震災後、死亡・行方不明(合わせて1,300人)・転出で人口が減り、約13,000人の町になっていました。箕面市の10分の1くらいです。

私は12月の1か月間、母子や成人の保健業務を担当する健康推進班で保健師として働きました。(地元の保健師さんは健康推進班に4人、地域包括支援センターに2人です。)

担当した業務は乳幼児健診や育児相談会、特定健診・被災者健診などです。特定健診・被災者健診は町内の集会所や体育館などに出張して、会場やレントゲン車を設定し、健診・アンケート調査を行うものです。町内11箇所、延べ15日間連続で実施しました。各会場には100人~200人近く来られ、全体受診者数は2,227人でした。私は問診を担当し、1,634人、町民の1割以上のかたにお会いしてお話することができました。

健診には、子ども連れのお母さんや働き盛りの世代の人、高齢の人、とさまざまな年代のかたが来られていました。会場は震災当時避難所にもなった場所

なので、健診に来られたかたは震災のときの苦労話やお互い無事で良かった事などを話され、再会を喜ばれていました。また、地元の保健師さんは町民のかたを家族ぐるみで把握されており、声を掛け合っておられました。

健診の間診を担当して感じたことは、健康的な生活を心掛けている人が多かったことです。タバコを吸っている人やお酒を飲んでいる人が意外に少なく、運動についても、仮設住宅の周りを散歩されているなど、生活環境が変わっても気をつけておられました。震災当時、避難のために高台まで全力で走ったことなどを聞くと、普段から健康づくりに取り組んでおくことは大切だと思いました。

また、避難所となる会場を知っておくこと、更に、そこへ避難するご近所のかたとの日頃のお付き合いがあることなどが重要になると思いました。

特にお子さんをお持ちのかたは、子どもが場所見知り・人見知りで不安にならないよう、地域の子育てサロンで慣れていた方が良いと思いました。

<質疑応答>

<被災者の精神面は？>

精神面では、震災当時は本当に大変だったようです。

駅のホームで電車を待っていた時に津波でホームごと流され、何とか近くの建物の屋上によじ登って助かったけど、誰もいなくて、寒さに震えながらたった一人暗闇で不安を抱えながら一晩過ごされたというお話を聞きました。

また、行方不明の家族の情報をあちこちの人に聞いて、足取りがわかったけれど、普段は避難訓練に熱心な人がなぜかその日だけは「もう少し様子を見る」と言って避難が遅れ、遺体で発見されたことも聞きました。

そうした不安や悲しみは計り知れませんが、「自衛隊のへりで助けられた」、「遺体を見つけてもらえて良かった」と自衛隊や消防隊員の人に心から感謝されていました。

私が派遣された時は震災から9か月経っていましたが、多くの人がありのままの状況を受け入れ、お話される様子から、大槌町の人々の強さを感じました。ただ、ご本人が気づかなくて無理をされている場合もあるので、周囲の人が「い

つもと違う」というサインを逃さず、お話を聴いて専門家へつなぐことも念頭に置かなくてはなりません。

<町の様子は？>

町の状況は、瓦礫が整理されているものの、新しく建てられるもの物はなく、壊れた建物がそのまま放置されているものもあります。特に役場の周りほとんどが流されて何も無い状態です。復興計画では8年がかりとなっていますが、今でも派遣職員は多いですし、日常業務もまだ震災前の通常業務には戻っていません。今後も人やお金の支援が必要だと思います。

<支援できる物は？>

物資は、意外な物があって当たり前の物が無いと思いました。たとえば、パソコンは業者が寄付しているので充実しています。車もシンガポールや韓国からの寄付でありました。乳幼児健診の身長・体重計や子ども用のハイチェアなども、立派な物がユニセフの寄付であったりします。でも、紙や模造紙、筆記用具が不足していました。役場のトイレや手洗いは仮設で、凍って水が流せないなど、不便でした。

実際、物資を送られても置き場所がなかったり、運ぶ人手が足りなかったりというのがあるので、ニーズにあった物や時期が大切になります。

復興に向けての人材確保とお金が今後の支援に役立つと思われます。

(両面印刷用調整白紙)

4. 学校建設・営繕支援

Contents

派遣報告書

みどりまちづくり部 西田 昭浩 (任務：学校建設支援)

現地からの職員レポート

みどりまちづくり部 西田 昭浩 (任務：学校建設支援)

派遣報告書

みどりまちづくり部 平山 福太郎 (任務：学校営繕支援)

職員手記

みどりまちづくり部 平山 福太郎 (任務：学校営繕支援)

派遣報告書

みどりまちづくり部 西田 昭浩 (任務：学校建設支援)

派遣先：岩手県大槌町

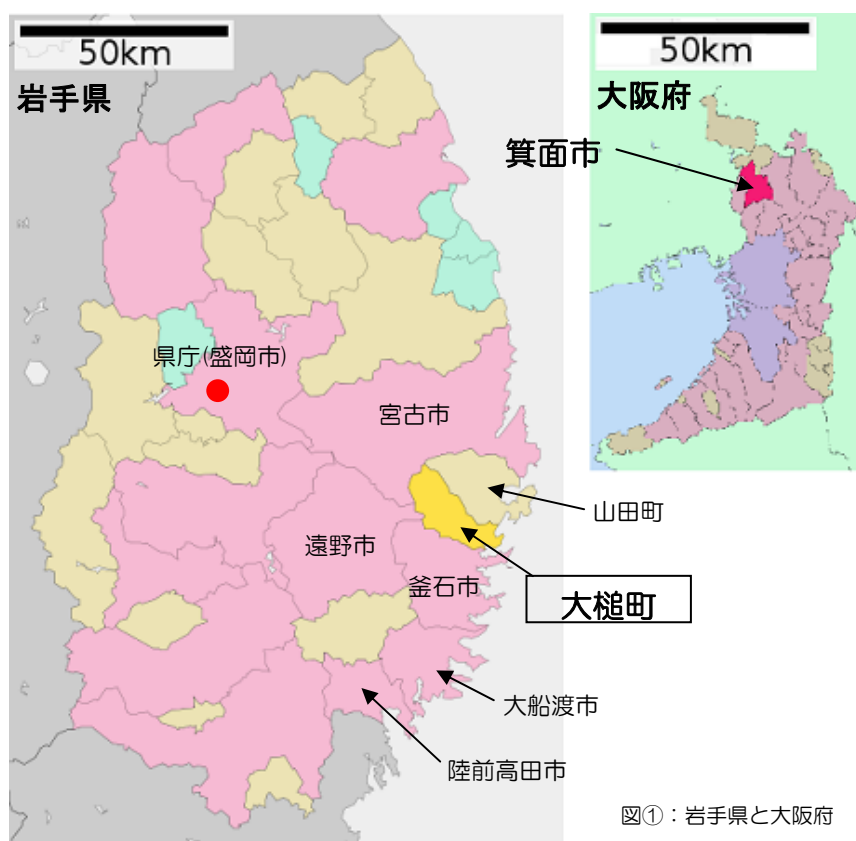
派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 10 月 31 日

〔1. 被災状況〕

大槌町は岩手県の沿岸南部に位置しており、平成 23 年 3 月 11 日に東北地方を中心に発生した東日本大震災で被災した市町村の一つです。東西に広い町で町域は約 200 平方キロメートルと、箕面市の 4 倍ほどで、震災前の人口はおよそ 15,000 人でした。主な産業は水産業で、定置網による漁業や、牡蠣などの養殖も盛んに行われていたようです。

大槌町の中心市街地は大槌湾に面した海沿いに集中しており、三陸鉄道や国道 45 号線といった主要交通網も海沿いにあります。市街地は、高さ 6 メートルほどのコンクリート製の防波堤と水門に守られていましたが、市街を流れる大槌川、小槌川の 2 本の河川沿いに遡上した津波と市街地の広範囲で発生した火災により、およそ 3,900 棟もの建物が被害を受けるなど壊滅的な状況となっていました。

今回の震災でお亡くなりになった方や、行方不明の方の人数は、人口のほぼ 1 割にも及びます。また、震災の影響で避難生活を余儀なくされてい



図①：岩手県と大阪府

る方も多く、11月1日現在の人口は約12,600人と、実に震災前の15%も減少しており、震災からの復旧はもちろん、人口流出対策も大きな課題となりました。

箕面市に置き換えて考えると、止々呂美や栗生、如意谷、新稲などの高台の住宅地を除き、全て流失したようなイメージです。赴任直後に大槌の景色を目の当たりにした時は津波の威力の凄まじさに只々愕然とするのみでした。



(写真①) 高台から見下ろした大槌町の市街地、写真右手奥の大槌湾から津波が押し寄せた。

大槌町の死亡者及び行方不明者数(2011年10月28日)

| 区 分 | | 人数 |
|-------------------|----------------|-------|
| ① 死亡者 | | 802 人 |
| 身元の 確認状況 | 身元が確認された遺体数 | 703 人 |
| | 身元が確認されていない遺体数 | 99 人 |
| 遺体の引 き取り状 況 | 遺族に引き取られた遺体数 | 549 人 |
| | 役場引取 | 253 人 |
| | 安置されている遺体数 | 0 人 |
| ② 行方不明者数 | | 520 人 |
| うち、死亡届の受理件数 | | 466 人 |

(表①) 大槌町ホームページから転載



(写真②) 大槌川に架かる橋
写真右側から津波が押し寄せ手摺が倒れていた。



(写真③) 仮設役場前の幹線道路
火災で使用できない建物もそのまま残されていた。



(写真④) 仮設役場前から見た大槌町の市街地
瓦礫は概ね撤去され、道路と電柱が復旧していた。

[2. 役場の状況と復興へ向けた動き]

震災前の役場庁舎は市街地の中心部に位置していたため、津波によって市街地と共に全てを失っていました。また、町長や課長級の職員など数十名の方が津波の犠牲となって亡くなられたことにより、震災直後には行政機能が麻痺していたとのことです。

(仮設役場の様子)

震災後の役場は津波の被害により使用できなくなった大槌小学校の校庭にプレハブ2階建ての仮設庁舎が建設されており、役場、消防署、警察署の機能が全て集約されていました。

しかし、震災により業務量が増加したため、私を含めた多くの派遣職員やボランティア活動が行われており、町民の待合スペースが屋外にあるなど、手狭で不便な状況でした。

全般的に職員数が不足しており、まだまだ多くの派遣職員を必要としていましたが、執務スペースが確保できず、派遣要請を断念せざるを得ないというのが実情のようです。



(写真⑤) 被災した消防庁舎



(写真⑥) 仮設役場正面

瓦礫の撤去や仮設住宅の建設、避難所の運営など最低限必要な業務は滞りなく進められており、近隣市町村と比較しても早い方でしたが、町長が不在であることが大きく影響しており、復興計画の策定など重要な政策の推進については大幅に遅れているように感じました。

職員数は8月末で約140名で、内30名ほどが全国各地からの派遣職員で構成されていました。大槌町には部局が置かれておらず、町長職務代理者一課長一班長で組織が構成されており、組織の最小単位は「班」となっていました。

(職場の様子)

私が配属されたのは、教育委員会事務局 学務課 学務班で、職員の構成は次のとおりです。

| | | |
|-------|-----|----------------|
| ・教育長 | 1名 | (特別職、町職員) |
| ・課長 | 1名 | (町職員) |
| ・班長 | 1名 | (町職員) |
| ・主任主査 | 1名 | (町職員) |
| ・指導主事 | 3名 | (町職員1名、派遣職員2名) |
| ・主査 | 2名 | (派遣職員) |
| ・主任 | 1名 | (町職員) |
| ・主事 | 3名 | (町職員) |
| ・臨時職員 | 1名 | |
| 計 | 14名 | |

学務課14名で本市の教育推進部に当たる業務を担当しており、通常の業務内容だけでも多岐に亘る上に、震災の影響で転入出、就学援助、学校への支援物資や支援活動に関する問い合わせが頻繁にあり、まだまだ混乱した状況が続いていました。



大槌小学校校舎

仮設役場庁舎

(←写真⑦) 仮設役場の全景
奥に見える建物は大槌
小学校の校舎

(復興に向けた動き)

このような状況の中、8月28日に町長選挙、町議会議員選挙が執行され、碓川町長が就任されました。新町長の施策方針では、復興計画の策定を年内(2011年12月)に完了することとされています。また、11月からは通常業務に加え、復旧復興事業に着手するため、3名の副町長制と部局制が新たに導入(別添1参照「大槌町ホームページから転載」)され、一日も早い復興に向けて新しいスタートをきりました。

[3. 学校の状況と仮設校舎建設]

大槌町には、町立の小学校が5校、中学校が2校ありますが、津波と火災の被害により、このうち小学校4校、中学校1校の施設が使用できなくなりました。



(写真⑧) 大槌小学校
1階を完全に飲みこんだ津波と、火災により被災
現在、一部が仮設庁舎として使用されている。



(写真⑨) 大槌北小学校
津波により被災した校舎には支援物資の自転車が
保管されている。



(写真⑩) 大槌中学校
運動場には被災車輛が保管されている。



(写真⑪) 大槌小学校
火災の発生した教室

学校施設の被害状況

| 学 校 名 | 浸 水 高 | 被 害 内 容 |
|---------|--------------------|---|
| 大槌小学校 | 3.7 m | 校舎1階内装、建具等流失、火災により校舎内外部に被害、3、4階は焼失、体育館床全面沈下、ブレースの座屈 |
| 安渡小学校 | 浸水無し | 地震により校舎3階のEXP.Jが変形、各所にクラック発生、一部で雨漏り |
| 赤浜小学校 | 校舎4.6 m 屋体1.0 m | 校舎1階内装、建具等流失、一部は倒壊 体育館は浸水以外に被害は認められない。 |
| 大槌北小学校 | 4.2 m | 校舎1階内装、建具等流失、体育館は外壁、建具等流失 土砂の流入により床面が損壊 |
| 大槌中学校 | 3.4 m | 校舎1階内装、建具等流失、火災により校舎内外部に被害、体育館は建具等流失<土砂の流入により床面が損壊 |
| 吉里吉里小学校 | 浸水無し | 被害は認められない。 |
| 吉里吉里中学校 | 浸水無し | 被害は認められない。 |

(表②) 大槌町教育委員会被害報告書から転載

8月1日現在の児童生徒数はおおよそ960名でしたが、この内740名が、通い慣れた校舎を失い、高台にあって津波の被害を受けなかった小学校の体育館や、同じく高台にある県立高校の空き教室などを利用して授業を受けていました。

しかし、これらの学校も運動場には仮設住宅が建ち並び、定員を遙かに超える児童・生徒が通学しているため、子どもたちにとっては満足な環境で学ぶことができないのが現状でした。



(写真⑫) 体育館を間仕切った授業の様子。

このような状況を改善するため、震災直後から仮設校舎を建設する計画が進められ、7月中旬から建設工事に着手しており、赴任後は前任者からの引継ぎを受け、仮設校舎を完成させることが主な職務となりました。

仮設校舎の概要は次のとおりです。

〔仮設校舎の概要〕

名 称：大槌町立小中学校仮設校舎

所 在 地：大槌町小槌第22地割「町立ふれあい運動公園 サッカー場」

敷地面積：約16,000㎡

延べ面積：約5,600㎡

工事期間：平成23年7月4日～平成23年9月11日

施 工：大和リース株式会社 盛岡営業所

建物概要：小学校棟 2棟 軽量鉄骨造 2階建 延面積 約2,900㎡

中学校棟 2棟 軽量鉄骨造 2階建 延面積 約2,200㎡

体育館 1棟 軽量鉄骨造 1階建 延面積 約500㎡

学童クラブ 1棟 軽量鉄骨造 1階建 延面積 約200㎡

(配置図、平面図は別添2のとおり。)



(写真⑬) 仮設校舎全景 右側が小学校棟、中央と左側は中学校棟

(建設地決定までの経緯)

仮設校舎は小槌川沿いに内陸方向へ約3km遡ったところにある町立サッカー場に建設しましたが、当初計画では津波により被災した「大槌北小学校」の校庭で建設することになっていました。基礎工事まで完了したところで、保護者から計画の見直しを求める意見が大きくなったため建設地の変更を行ったとのこと。このこと



(写真⑭) 仮設校舎全景 手前は運動場

から、余震や津波に対する不安や恐怖が根強くあり、今後の復旧・復興に向け

て行政の配慮が必要であることがわかりました。

(事業費の構成)

小学校棟、中学校棟については大部分が国庫補助金によって建設されましたが、体育館については国庫補助金の対象外事業とされたため、日本赤十字社の全面支援によって建設されました。また、学童クラブ（学童保育施設）については公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンによって建設され、寄贈を受けました。なお、体育館の補助制度については後日、国庫補助金の対象として見直があったとのことでした。



(写真⑯) 建設中の仮設校舎



(写真⑰) 建設中の体育館 床の組み立てが進む

(建設工事から開校までの状況)

建設工事はプレハブリースの大手業者である、大和リース株式会社（本社大阪）が施工していましたが、震災の影響によりプレハブの需要が高まっていることから人手が不足しており、工事担当者は大阪府や埼玉県から、プレハブの組立作業は岡山県から、内装工事は青森県、大阪府からなど、全国各地から多い日は一日に200人もの作業員により建設が進められました。

また、学校の家具類も併行して準備を進め、被災した校舎を調査し使える物に移設したり、近隣自治体からの協力により寄贈を受けたりするなど、できる限り納期を短縮して、竣工に間に合わせる工夫が必要でした。

さらに、地震の影響による地盤のズレや、津波によって敷地図面が失われていたことから正確な設計が出来ていないため、施工を進めながら設計を見直し、不足する設計図面を追加していくという、通常ではあり得ない作業が求められました。また、毎日大量に材料が搬入され施工が進んでいくため、検査や詳細

部分の打合せなど、9月13日の竣工まで現場での業務に追われる日が続きましたが、9月15日には竣工式典が行われ新聞やテレビ等で大きく報じられました。

その後、貴重な授業日数を減らすことのないよう週末の3連休を活用して、ボランティアの方々が中心となって引っ越し作業が行われ、9月20日に小学校が、9月22日には中学校が予定どおり開校しました。



(写真⑰) 仮設校舎での引越しの様子



(写真⑱) 仮設校舎体育館での開校式典の様子

[4. 派遣職員の生活]

大槌町内は仮設住宅の整備が完了して間もない状況で、ホテルや賃貸住宅などが無く、職員が宿泊できる場所がないため、近隣の釜石市や遠野市で宿舎やホテルが確保されています。私は大槌町から車で1時間半ほど走った遠野市にある岩手県の職員寮を借り、毎日車で通勤することになりました。

(遠野市の様子)

遠野市は地震で市庁舎が全壊するなどの被害がありましたが、市内はほぼ復旧しており、生活に必要な食料品や日用品、ガソリンなどは大阪と同じように入手することができ、生活の不便はありませんでした。花巻空港や東北自動車道などの物流の拠点から、沿岸部の釜石市、大槌町、大船渡市などへ向かう国道283号線が通っており、ボランティアに来られる方や、建設業関係者、私と同じような派遣職員の活動拠点となっていました。

(大槌町への通勤)

大槌町役場への通勤経路は、①峠を越えるルート、②釜石市街を經由するル

ートの2通りがありました。

①峠を越えるルート

遠野市から県道35号線→国道45号線（沿岸部）と走る45km、1時間20分ほどのルートです。途中で標高900mほどの峠を越えるため、急勾配、急カーブが続き、道幅も狭く緊張感をもって運転しなければならず、相当体力を消耗しました。

②釜石市街を経由するルート

遠野市から国道283号線→仙人峠道路（自動車専用道路）→国道45号線（釜石市街）→国道45号線（沿岸部）と走る60km、2時間弱ほどのルートです。道幅も広く途中の山間部はほとんどトンネルなので運転のストレスは少ないですが、朝晩とも釜石市街の渋滞がひどく時間が読めないため、帰宅時のみ、このルートで通勤していました。



(図②)：岩手県大槌町周辺

いずれのルートも沿岸部の被災地に出ると信号が無くなり、希に大きな陥没や、路肩が崩落している箇所もあります。また、舗装が悪くなり、路面が波打っているため注意が必要です。夜になると防犯灯や道路照明が皆無ですので真っ暗になります。

更に、大潮の日には、釜石市街地の国道が潮位の上昇によって冠水し、通行止めになることもありましたが、現在は道路の嵩上げ工事が完了し解消されたようです。



(→写真⑱) 冠水した釜石市内の道路の様子



(→写真⑳) 通勤途中の釜石市内の様子
信号は停止しており、泥や瓦礫が散乱している。

[5. 派遣期間を通じて感じたこと]

震災発生から半年以上経過しているにも関わらず被災地では、頻発する余震や地盤沈下による浸水など、不安で不便な生活を送らざるを得ない状況が続いていました。今回の震災では生活基盤のほぼ全てを津波により失った自治体が多くあるとともに、仮設住宅での生活によって既存のコミュニティは崩壊しており、ハード・ソフトの両面から復興に向けてまだまだ多くの支援を必要としています。被災地が復興を迎える日まで、このことを忘れることなく自治体の職員として、できる限りの支援を続けなければならないと感じています。

今回の派遣は、大阪府市長会を通じたカウンターパート方式によるもので、この制度自体は特定の自治体を継続的に支援することで情報共有がしやすく有効なものですが、被災自治体と我々派遣職員の間を複数の派遣調整機関が経由しているため、現地との情報伝達に時間が掛かりすぎると感じました。それぞれの機関において必要な役割を果たしておられるものと思いますが、我々基礎自治体を含めて、より迅速な情報共有に努めて被災自治体のニーズに、よりの確で、迅速に答えていかなければならないと感じます。

| |
|----------------------------|
| 現地からの職員レポート（メール） |
| みどりまちづくり部 西田 昭浩（任務：学校建設支援） |

（2011/08/09 西田→まちづくり政策課）

※どのような支援物資が必要とされているか？との問い合わせに対する返信

おはようございます。大槌町の西田です。

こちらは週末から天気が良くなり、朝晩は涼しいものの日中は暑くなってきました。

仕事の方（仮設校舎建設）は、しっかりした図面が無いまま工事に着工しているため、教育委員会の意向と現場の調整で、仮設庁舎と現場を行ったり来たりしています。

忙しいものの、なんとかやっています。

さて、支援物資の件ですが、私が今まで町内を見て回ったのと学務課で聞くところによれば、仮設住宅の入居がだいぶ進んできたようです。

教育委員会の仮設事務所がある、「中央公民館」に併設されている避難所も明日閉鎖されます。また、大槌町内でも2件目のローソンの営業が始まり、普段の生活に必要な最低限のものは困らないレベルにあると思われます。

あくまで、私がわかる範囲ですが、

> 「移動式の循環型入浴システム」と大量のタオルなどを…

→仮設住宅の供給が進んでいるので、不要になるかもしれません。

> 「メッセージ入りのうちわ」を…

→仮設住宅はクーラー完備で、むしろ寒いとも聞きます。

…ということにもなりかねないかもしれません。

少し話がそれますが、教育委員会にも支援物資の申し出の電話が、よくかかってきます。

私が受けただけでも、ピアノや自転車など1週間で、2～3件は聞きました。しかしながら、支援したい気持ちと、ニーズが合わず殆ど断ることになってい

ます。

現実的な話ですが、「用途を限定しない義援金が今一番必要です。」

町全体として何が必要なのか？は、把握が困難と思われませんが、教育委員会としては必要な物は山ほどあります。指導主事の先生と相談した結果、9月に開校予定の仮設校舎に必要な物品を送って頂けないかということになりました。次のとおりです。

- ①教卓 K38-700 (プラス教材総合カタログより) 18台
- ②書類保管庫 S-345F1N (コクヨカタログより) 18台
- ③書類保管庫 S-325GF1N (コクヨカタログより) 18台

上記物品は全て、津波によって流失したか避難所で使用して行方が分かりません。

全部で、定価ベース230万程度です。

PDFがとれませんので、カタログをFAXで送っておきます。

こんな物でもいいんでしょうか？ 予算要求みたいになりましたが、よろしくお願いします。

長くなりますが、近況の写真を添付します。

- ①教育委員会のある中央公民館から見た大槌の市街地です。がれきの片づけが進んでいるものの復興と言えるまでには、まだまだ時間がかかりそうです。
- ②被災した、大槌北小学校の体育館です。2階の手すり辺りまで津波が来た跡が残っています。ステージ背面の壁は鉄筋コンクリート製ですが、一部が無くなっています。また、時計は津波の到達時刻3:15頃で止まったままです。この学校の児童・教諭は津波が到達する10分前に避難を完了し、全員無事だったそうです。(震災の約1週間ほど前に避難訓練があり、経験が生きたとのことです。)
- ③仮設校舎の建設現場です。現場の様子は大阪と変わりませんが、全国各地からの支援により建設が進められています。プレハブの材料は福岡から、とび

職さんは岡山から、大工さんは青森から、など、現場監督さんは尼崎から来ているそうです。

部長からのお言葉にもありましたように、急がずぼちぼちとやっていきます。

(2011/08/22 西田→倉田市長)

突然こんばんは。大槌町の西田です。

こちらへ赴任してもうすぐ1ヶ月が経ちますので、勝手に報告します！あくまでも私的な報告ですのでダラダラと長いです。グチも混じってます。

①大槌町の状況

大槌の現状です。前にもメールしましたが第一印象はとにかく衝撃的です。こちらへ赴任する前に写真・動画を見まくりましたが、百聞は一見にしかずです。本当に何もなくなった大槌の市街地を直に見て津波の恐ろしさを実感します。(実際に被災された方と比べればほんのわずかかもしれませんが…)

震災直後に大量に散乱していたと思われる瓦礫は海岸よりの空地に集積され、役場から遠くに瓦礫の山がいくつか見えます。赴任してからもう1ヶ月ですが、その山が減ったようには感じられません。いつになったら無くなるのでしょうか？

市街の中心部では、使えなくなった建物の解体が本当に少しずつ進む中、プレハブで営業する店舗が、ちらほら出てきました。少し脱線しますがローソン、スゴイですね早くも大槌で2件目のローソンがプレハブで復活しました。コンビニの復興の早さだけは世界に誇れるかもしれません。

お盆前に全ての避難所が閉鎖され全ての方が仮設住宅などに移られたようです。避難所の跡は残された支援物資などが山積みで片付けが大変ですが。

この状況で行政としては何をしていくのか?今どうしているのか? … よくわかりません。教育委員会の事務所と役場が離れている上に、今週町長選挙があるのでホントに何をしているのかわかりません。僕がニブイだけかもしれませんが。

②職場（教育委員会）の状況

フツーに働ける状況です。盆前にはクーラーが設置されましたが、すぐに役目を終えました。かなり涼しいです。

教育委員会の学務課に配属されていますが、教育長以下15名ほどの体制で、政策、総務、学事、人事、教育、給食、施設、更に支援団体や物資の受け入れなど全てを行っています。それ故に電話が鳴りまくりです。

職員は、元々の町の職員、再雇用、非常勤、近隣自治体からの派遣、遠方からの派遣（僕のこと）などの混成部隊ですが、職場の雰囲気も非常に良く、今のところ特に問題は無いようです。こんな状況ですから、みんな一生懸命働きますし、それぞれの責任を果たしているからでしょうか？統括する課長や、主幹は大変でしょうが…

僕の仕事は、事前に聞いていたとおり仮設校舎の建設です。おかげさまで引き継ぎもきっちり受けることができました。学校施設は日本全国共通ですので、こちらの方は全くと言っていいほど問題ありません。

工事は大和リースが請けています。（大阪の会社です。）現場監督さんも大阪の方です。また、職人さんも北は青森、南は岡山からなど様々です。地元では建設関係の仕事は手一杯になっているようです。

電話がかかってくるので当然受けませんが、方言がわかりづらく苦戦しています。電話の内容で多いのが、支援物資（学校関係）の申し出、支援団体からの支援の申し入れ（赤十字など含む）、マスコミからの問い合わせ、転入の問い合わせ（仮設住宅の完成に伴い、非難されていた方がたくさん戻ってこられます。）などです。

支援物資ですが、支援したい物資と、こちらのニーズが合わずに断るケースが非常に多いです。子供に本を…とか、子供に楽器を…とか、花を贈りたいとか、ありがたいですが既に有り余っており、断るしかない状況です。保管場所にも四苦八苦しています。

支援していただきたい物はたくさんありますが、うまくまとめることが出来ていません。これまでの支援物資の情報管理ができていなかったり、今学校に何があって、何がないのか？といったことが把握できていないことが原因です。学校現場でも、被災した物や、避難所や災害対策に使用して行方がわからない

ものなど、物品の管理が曖昧になっている様です。これから仮設校舎の開校を迎えますが、とりあえず必要最低限の物で臨もうとしています。まあ当面はこれで十分でしょう。

箕面からは、教卓と書棚をよろしくお願いします！（風呂や、うちわよりも、確実に役立つはずです…）

③生活面

僕の生活です。宿舎は遠野市にある岩手県の官舎で、1DKに一人住まいです。エアコンが無く、網戸も無いので、お盆前までは暑くても窓も開けられず苦しんでいましたが、最近涼しくなったので快適です♪ 遠野市は震災による大きな被害は無かったようで、（何故か市庁舎は半壊していました。）生活に必要なものは、箕面と変わらないレベルで何でも揃っています。居酒屋もいっぱいあります。

初めは慣れない土地に苦戦もしましたが住めば都ですね。この前の日曜日は、世界遺産平泉に行ってきました。震災の影響で観光産業は冷え込んでいると聞きましたが、結構な人出でした。

箕面と何もかわらへんやん！と言いたいところですが、余震がひどいです。これだけが不安です。体を感じる揺れが、ほぼ毎日1～2回きます。先日仕事中に震度5クラスの余震があり、職場にも緊張が走りました。全員津波警報に注目していましたが、岩手県内は無事でした。こちらの人は、余震発生→出入口ドアを開けて避難路確保→火元確認、といった動作が徹底されています。経験から身についたのでしょうか。

さて、遠野から大槌までは、毎日車で片道1時間強を通勤していますが、これがかなりキビシイです。狭い峠道で運転が忙しい上に、大型トラック等の対向車も走って来ます。更に雨が降ると濃霧が発生し前がほとんど見えなくなることもあり、気をつけて走っていてもヒヤリとする場面があります。

僕は10月までで気候の良いときに来ていますが、11月から派遣される方が通勤するのは、凍結や積雪のことを考えると不可能にも思えます。釜石市を経由するルートもありますが、こちらは渋滞あり、ひどいときは2時間弱かかります。同じく冬場には凍結などの恐れもありそうですので、悪条件となりそ

うです。釜石市や宮古市から通勤できる方法を考えた方がいいかもしれません。

以上、今把握できるこちらの状況です。気持ちだけ先走ってやってきたように思いますが、他ならぬ学校施設のことですので、これまでの経験から何とか役に立てそうです。「ムリするな」とか「ほちぼちやれよ～」とか、よく言われますので、ほどほどにがんばりますが。

(2011/08/30 西田→倉田市長)

こんばんは。大槌町の西田です。余裕があったら小さなことでもメール！・・・なので、メールです。昨日、新町長が決まり、大槌町も新たな一歩を踏み出しました。

最近、学務課の皆さんと何回か呑みに行く機会がありました。

仕事中は「ここは、コールセンターか？」というくらい鳴り続ける電話のために、なかなか話す機会も無いのですが、呑みに行くと色々と被災当時のことを話してくれます。

～ぼくと同年代の学務課の主事、Aさんの話です。～

震災の当日、町長の決裁をもらうために高台の中央公民館内にある学務課の事務所から、市街地にある役場へ出かけた際に地震が起こったそうです。役場では手順に従い災害対策本部を開設する準備が始まりましたが、地震の大きさから庁舎内は危険と判断し、庁舎前の駐車場へ机や椅子を運びだしていました。

Aさんは中央公民館横の体育館で避難所の開設をするために、すぐに中央公民館へ戻ることにしました。津波が役場に到達する10分ほど前だったそうです。役場では、「津波が来るから避難しましょう」と言う職員と、災害対策本部の設営を進める職員で意見が分かれていたそうです。

Aさんが公民館へ戻ると、既に公民館には多くの避難者が集まっていました。その後まもなく津波が到達したそうです。すぐに県庁へ状況を報告するために電話をかけましたが、既につながらなくなっていたため、次に、衛星電話の開設を思いつきました。一般の交流電源はすぐに使えなくなったので、車のバッ

テリーから電源をとったそうです。

県庁に電話がつながったのは日が暮れてからでした、報告に対して県庁からは「とにかくがんばって下さい。」の一言だけだったとか。

暗闇・寒さ・飢え・周囲から迫る山火事などから、中央公民館に集まった5,000人の避難者を守らなければならず、このときは死を覚悟したそうです。道路など交通網の寸断と混乱のため、2日後に自衛隊の先遣隊が到着するまでは孤立が続いたそうです。山火事が続く中、釜石方面の道路上に（大阪市の）消防車の列が見えたときに、はじめて「助かった」と思ったそうです。（大阪府警の活躍などもあり、大阪には深く感謝されています。）

中央公民館（現在のぼくの職場でもあります。）の廻りには、このときの山火事で焼けた樹木が残っています。Aさんの話を思い出しながら、山火事の跡を見ると背筋が凍りつきます。

また、被災時に確実に使える交通網の重要性や車のバッテリーで稼働した衛星電話など、箕面に当てはまるかわかりませんが(?) 本当に生きた防災のヒントが、明るく笑いながら話してくれた体験談の節々に感じられました。それにしても、直に聞くと本当に身震いします。

Twitterとホームページ見ました。

昨年、あれほど耐震補強をしたにも関わらず、この前までは内心、防災対策の必要性を軽んじてましたが、富士宮市との協定締結が、今は本当に重要に感じられます。

(2011/08/31 西田→職員課)

※今後の職員派遣に係る判断材料として、生活状況の問い合わせに対する返信

こんにちは。大槌町教育委員会事務局の西田です。

いつも、色々ありがとうございます。

>●道路事情について

> ・通勤時間（1時間半）なども含めて、体力的にどれだけ負担になっている

のか、ペーパードライバーに毛の生えたような職員でも通勤可能か。

通勤ルートは2ルートあります。①釜石市を經由するルートと、②峠を越える最短ルートです。

①釜石市を經由するルート

- ・私は出勤には使っていません。帰宅時に2～3回走りましたが、釜石市内の渋滞がひどく、大槌を18時に出発すると、遠野に着くのは20時前になります。高石市から派遣の保健師さんがこのルートで通勤されています。遠野を6：30に出発すれば渋滞もなくおよそ1時間20分で到着します。

8時30分の始業時間から逆算し、丁度いい時間（7時頃）に出発すると渋滞で1時間30分でも厳しいそうです。

このルートの前半部分は「仙人峠道路」という直線の自動車専用道路で、ほとんどトンネルです。釜石の市街地を抜け、大槌までは海岸線沿いの国道を走りますが道幅も広く運転のストレスも少ないです。

しかし、トータルで片道50km以上あり距離が長く、渋滞すると体力的にも負担が大きいです。

- ・夏場であればペーパードライバーでも通勤可能です。

②峠を越える最短ルート

- ・県道35号線、笛吹峠を越えるルートです。途中で標高1000mほどの笛吹峠を越えるため、こう呼ばれています。毎日、このルートを往復しています。狭い峠道で勾配もきつく、ハンドル操作が忙しい上に、大型トラック等の対向車も頻繁に走って来ます。更に雨が降ると濃霧が発生し酷いときは視界が30m程になります。気をつけて走っていてもヒヤリとする場面があります。当然体力的には相当消耗します。

遠野を7時に出発して大槌に8時に着きます。時間的に有利なので私はこのルートを通っていますが、ペーパードライバーには相当な負担になると思います。帰りも同じくらいの走行時間です。ただし、暗くなると視界が悪くなる上に鹿や熊などの動物が結構歩いているため、スピードが遅くなり時間がかかる場合があります。

このため、残業で遅くなった日は上記①のルートで帰宅するようにしています。

- ・どちらのルートも沿岸部の被災地に出ると信号が無くなり、希に大きな陥没や、路肩の崩壊などもあります。また、舗装が悪くなり、路面が波打っているため注意が必要です。夜になると防犯灯や道路照明が皆無ですので真っ暗になります。車のライトは常に点検した方が良さそうです。

> ・冬は、雪道に慣れていない大阪の職員が運転できるのか。（笛吹峠のルートは、積雪があると地元の人も通らないとの噂あり）

- ・私は10月までで気候の良いときに来ていますが、11月から派遣される方が通勤するのは凍結や積雪のことを考えると、いずれのルートも不可能にも思えます。

大槌の皆さんの話では、大槌や釜石などの沿岸は路面がアイスバーンになるとのこと。また、遠野市のある内陸部は雪深く除雪車が入るため、圧雪路面になるそうです。笛吹峠のルートは県道で除雪が入るため、通行は可能とのことです。

- ・雪道の運転経験、チェーンの巻き方、凍結対策などの知識が無ければ、通勤はやめておいた方がいいかもしれません。

>●●仕事の状況について

> ・今の仕事の状況と今後の見込み。

【私の仕事】

- ・仕事は大きく次の5点です。

- ①仮設校舎の建設
- ②復興計画策定に伴う学校施設計画の策定
- ③学校施設関連の支援物資の受け入れ調整
- ④仮設校舎に関する報道対応
- ⑤被災校舎の解体に係る交付金の交付申請と工事発注

①仮設校舎の建設

- ・大槌町内の4小学校、1中学校の計5校が津波や火災により使用出来ないため、仮設校舎の建設が7月から進められています。

仮設校舎建設に係る現場監理と設計が主な仕事です。機械警備や維持管理委託の発注も行います。現在のところ9月20日の開校を目指しています。工事の進捗率は80%といったところです。

大槌町の職員には大変失礼な話ですが、まともな図面も無く建設業者と5億円もの建設リース契約をしたため、町教委の意向が契約内容に反映されていません。また、建設業者も学校建設の経験が少ないため意志の疎通が図れていません。

意思疎通のための図面を作図して町教委の意向を業者に伝達し、必要な機能・設備を追加し、不要なものを取りやめてコストバランスをとる。といった作業です。

ここまでは箕面でもよくやっていた仕事ですが、災害復興であるために、「日本赤十字」や「セーブ・ザ・チルドレン」といった一部費用を支援する団体の意向もあり、調整は複雑です。

学務課には建築技術職が一人もいませんので、(町全体でも2人しかおらず、その2人は仮設住宅にかかりきりです。)全てにおいて主体的に動く必要があります。よほど重要でない限りは判断を求められます。

- ・赴任した翌日には「あれどうなってるの?」とか、「視察の依頼が来てるので対応お願いできますか?」とか、右も左もわからない状態で対応を求められました。

しかし、自治体の仕事、学校の仕事の基礎は、どうやら全国統一の様で、慣れてしまえば箕面と同じように働くことができ、現在は仕事上大きな問題はありません。(そのつもりです。)

②復興計画策定に伴う学校施設計画の策定

- ・8月28日の新町長就任に伴い、年内に復興計画を策定する方針が示されました。これに伴う学校施設基本計画の策定を求められています。まだ、これから本格化する仕事ですが、仮設校舎竣工後はこれがメインになりそうです。

③学校施設関連の支援物資の受け入れ調整

- ・支援を申し出ていただいた団体や個人の方との調整です。必ずしも支援したい側の意向と、学校のニーズが合わないため、様々な調整が必要です。

これまでに申し出があったのは、ピアノ、50㎡程度のプレハブ建物、学校の校庭に樹木、ストーブ、児童用の机、風力発電設備など。

物資は送るので、そちらで取り付けて下さいとか、仮設校舎の開校に時期が合わないとか、ストーブは既に有り余っているとか、ほとんど断る場合が多いですが、本当に毎日多くの支援の申し出がありますので、相手の意向を聞くだけでも一苦勞です。

④仮設校舎に関する報道対応

- ・テレビや新聞各社から問い合わせがありますので、電話や現地での取材対応です。これまでに報道されたのは、NHK仙台支局、岩手日報（岩手の地方新聞）です。現在取材を受けており、今後報道される予定としては、NHK宮古報道室、日経新聞、中日新聞、東京新聞、朝日新聞、その他フリーカメラマン数名などです。

⑤被災校舎の解体に係る交付金の交付申請と工事発注

- ・学校施設は、環境省の廃棄物処理事業の対象となったため、今後交付申請を進めていきます。

以上、派遣期間満了まで出来る限りの対応を行います。

- ・私の職場は写真に添付しているプレハブの庁舎ではありません。教育委員会は学務課と生涯学習課の2課で構成されており、事務所は役場から徒歩5分ほどの裏山にある中央公民館内です。

お盆前までは事務所を1歩出るとすぐに避難所という環境でしたが、現在は避難所も閉鎖され普通に事務仕事ができます。

- ・学務課の職員は、教育長以下15名程度で、教育長、課長1名、班長1名（課長補佐級のような）事務職員3名、技能職員1名、指導主事2名、指導員1名が、正職員です。他に派遣の指導主事が1名（岩手県一関市）、事務職員1名（岩手県軽米町）、技術職員1名（私のことです。）、臨時職員1名、再雇用1名といった体制です。

この体制で、政策、総務、施設、給食、学事、人事、教育といった分野を所管しています。

【大槌町の状況】

- ・大槌は東西に広く町域は約 200 k m²と、箕面市の約 4 倍です。人口は震災前で 15,000 人、震災で人口の 1 割の方が亡くなりました。

市街地は海岸線沿いに集中しており、高さ 6 m ほどの防波堤にまもられていまが津波と火災でほぼ全てが被災しました。(適切な表現ではないかもしれませんが、市街地が「消えて無くなった」と表現した方がいいかもしれません。)

箕面市に置き換えると、止々呂美と粟生間谷や平和台などの高台の住宅地を除き、全て流失したようなイメージです。

- ・瓦礫は概ね片付き港付近に集積されていますが、この瓦礫の山が減る気配は一向にありません。
- ・市街地では被災した建物の解体が本当に少しずつ進んでいくなか、ローソンをはじめ、プレハブで営業する店舗がちらほら出てきました。
- ・インフラは幹線道路沿いのみが復旧しています。
- ・仮設住宅の建設がほぼ全て完了し、避難所はお盆前に全て閉鎖されました。
- ・これから生活水準がどんどん上がっていく段階にあると思いますが、何もなし市街地を見ると、復興はまだまだ先のことの様に思えます。

> ・西田君は残業をどのくらいしているのか。土日の出勤もあるのか。(泉南市から派遣されている戸籍担当の職員は 8～9 時まで残業しているとのこと)

- ・基本的に学務課は 6～7 時頃には全員帰宅されますので残業はほとんどありません。週に 1～2 回程度、7 時から 9 時頃まで残業しますが、仕事は自分のペースで組立てられますので残業するか、しないかは自分次第です。

> ・体力的や精神的な負担は？

- ・赴任直後は、被災地という特殊な環境、慣れない仕事・人間関係、過酷な通勤条件から体力的・精神的に相当な負担があります。

- ・糸川さんの報告書を送っていただき読みましたが、私も軽いホームシックになりました。赴任直後は本当に無理をせず、環境に適応することが大切と思われます。

> ● 宿舎での生活状況について

> ・ 宿舎の環境は？

- ・遠野市の市街地にある岩手県の職員公舎で鉄筋コンクリート造の築30年程度です。
- ・室内はリフォームされておりきれいです。間取りは7畳和室＋キッチンの1Kで、バス・トイレは独立してあります。
- ・家電製品は冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、ガスコンロ、湯沸器、洗濯機、テレビ、掃除機、扇風機、灯油ストーブがあります、エアコンはありません。
- ・網戸が壊れています。借家のため勝手に直せません。夜は大量に虫が入るので窓が開けられません。

私の部屋は一番西側にあり、盆前までは帰宅すると西陽で室内がかなり暑くなっていました。土日は部屋の中にいるのは大変です。最近は涼しくなり日中でも30度を超えることはありませんので、過ごしやすくなりました。

- ・車で10分圏内にスーパー、コンビニ、ホームセンター、電気店、定食屋、弁当屋、そば屋、居酒屋、などが複数あり、生活の不便は一切ありません。
- ・閑静な住宅地ですが、閑静すぎて夜は真っ暗で、物音ひとつしません。
- ・職員公舎は2つあり、糸川さんの報告にあったのは遠野市？の職員寮です。私の職員公舎から50mほど離れた場所にあります。こちらは2名1室ですので、糸川さんの報告のとおり大きく環境が異なります。プライバシーも無いですし、お互いに気を遣うと思います。

> ・ 自炊はできているのか。

- ・可能です。

> ・ プライバシーは確保できているのか。

・通常のワンルームマンション並のプライバシーが確保されています。

> ・休日はどのように過ごしているのか。

- ・洗濯、掃除のあと、自由に使える車がありますので岩手県の地図を購入し、その辺を走り回っています。(単身赴任で家に閉じこもると精神的に悪そうなので。)都合が合えば、大阪から派遣されている職員同士で誘い合っかけて出かけることもあります。電車は2～3時間に1本程度しかありませんので、気分転換には車が必須です。
- ・これまでに行ったところは、東→大槌町・山田町・大船渡市など、西→日本海、南→平泉町、北→未開拓です。
- ・内陸へ入れば、のどかな風景や、わんこそば・盛岡冷麺などの名物、温泉、世界遺産平泉など、気分転換はいくらでもあります。冬にはスキーやスノボも可能です。また、仕事中には、なかなか行けない被災地の状況も見て回っています。町内の様子は写真を添付します。

> ・遠野よりより近い場所に宿舎等の確保を考えた方がよいのか。

- ・生活の利便性を考えれば遠野市は最高の環境ですが、冬場の通勤条件から宮古市、釜石市、山田町など沿岸部で宿舎を確保する方が望ましいです。

> ●その他、不便に感じていること、改善して欲しいことなどなど。

- ・堺市からCさんという職員が区画整理業務が専門で派遣されていますが、大槌町で必要としていたのは用地取得担当の職員だったそうです。

大阪府の調整ミスか大槌町の手違いかはわかりませんが、派遣に当たっては事前に仕事の内容を良く確認しておいた方がいいと思われます。

Cさんは11月末まで4ヶ月間の派遣予定でしたが、9月末で派遣を打ち切る方向で検討が進んでいるとのこと。ご本人もそれなりの覚悟で赴任したはずですし、この様な間違いは本人はもちろん、派遣する側される側双方にとって何のメリットも無いはずですので、今後改善されることを望みます。こちらでできることがあれば、連絡下さい。

- ・関西広域連合の盛岡現地事務所の所長さんで、Bさんとう方がいらっしゃいます。この方は4月からこちらへ赴任しておられますので、現地の情報にも詳しく、かなり頼りになります。非常に熱心な方でもあります。大阪府との調整で難しい部分はこの方と直接調整した方がいいかもしれません。
- ・改善できませんが、余震が相当多いです。1日に1回必ずと言っていいほど発生します。多いときには1日に数回発生します。不安になるだけなので今後派遣の方には伝える必要はありません。
- ・大阪と気候がかなり違います。気温も10℃前後差があるようなことがあります。特に朝晩は既に冷え込みますので注意が必要です。

以上報告します。

なお、プライベートなことも書いていますが、今後の参考になると思いますので、必要であれば、今後派遣される方に全て伝えていただいて結構です。

(2011/09/01 西田→まちづくり政策課)

※図書の寄贈、まちかど文庫のようなものの設置に関してニーズはあるか？との問い合わせに対する返信

お疲れ様です。大槌町教育委員会事務局の西田です。
大槌町の担当課に図書事情を確認してきました。

まず、図書は必要とされているようです。

大槌町の仮設住宅は全部で26か所あり、全てに集会所や談話室が設けられています。集会所の仕様はバラバラのようです。

仮設住宅が建設されて間もないため、今のところ集会所には何も入っていないとのことです。

図書を寄贈したいという動きは既にあり、ボランティア団体が寄贈に向けて準備を進めています。書棚を作って棚ごと寄贈するという方法です。図面を見る限り25台を制作するようです。

集会所内にはまだ余裕があり書棚の設置は可能とのことで、上記の書棚の横に並べて設置することになると思われます。

出来れば発送するだけでなく、現地で搬入設置まですると、こちらの職員の負担も減ります。設置については委託業者でもいいかもしれません。

こちらへ来てから支援物資の量の多さに驚いています。ありがたいことですが、その分搬入や仕分けなどの作業が増え、被災者の元へなかなか届かないのが現状のようです。

教育委員会の事務所にも行き場を失った支援物資が山積みになっています。

このような事態を避けるため、設置までの支援を検討できないでしょうか。よろしくお願いします。

ところで、昨日の大槌湾は大潮でした。

大潮の日は地震による地盤沈下のためか、市街地の一部が海に沈みます。

仮設役場から100mほどの距離です。

(2011/09/16 西田→三上消防長)

こんにちは。大槌町教育委員会へ派遣中の西田です。

色々とお気遣いいただきありがとうございます。おかげさまで元気でやっています。

仕事の方も赴任してから携わってきた、大槌町の仮設校舎の建設が完了し、昨日無事に開校式を迎えることが出来ました。

さて、「消防の皆様の代理でプレゼンターを」ということですが、正直なところ、身に余る大役とっております。ですが、私で良ければ務めさせていただきたいと思います。送っていただく防火衣の写真、送り先、送付日、受け渡しの方法など決まりましたら、ご連絡ください。

ところで、今私が働いている課の職員さんから聞いた話ですが、大槌では震災直後の二次災害で、大きな山火事があり、震災後の2日間は生きた心地がしなかったそうです。

3日目にやっと大阪から消防が到着し始めて「助かった」と思えたとか。このことから、大槌の皆さんは大阪の消防署に深く感謝されていました。箕面市の消防本部もこの中に入っていたのでしょうか？震災直後の混乱の中、迷わず被災地へ駆け付けられた消防の皆様には本当に頭の下がる思いです。

(2011/09/28 西田→まちづくり政策課)

お疲れ様です。大槌町教育委員会事務局の西田です。

9/23～25の連休にかけて帰阪予定でしたが、台風15の影響により大槌町内に避難指示が発令されるなど、諸事情により帰阪することができませんでした。

台風当日は、大量の降雨、地震による地盤沈下などの影響により釜石市内の幹線道路が海水交じりの水で冠水しました。

通常1時間30分程度で帰宅できますが、この日は2時間半もかかりました。大槌町内の方は小規模のがけ崩れ、倒木があった程度です。

先週帰阪できなかつたため、10月11日に休みを頂き、10月8日～11日にかけて帰阪予定です。

11日に時間がとれましたら、市役所に寄る予定です。

仕事の方ですが、先週で仮設校舎の建設が終わりましたので、今週から復興計画の手伝いが主な仕事になります。

大槌町も小中一貫校の建設を目指しており、復興計画の素案に示された学園エリアに一貫校の計画を策定していきます。

復興計画（写真添付、都市マスみたいな感じです。）は、町長の指示により年内を目処に策定することとなっていますので、10～12月という短期間での計画づくりとなります。

復興に向けた具体的なスケジュールは示されていませんが、防潮堤の建設や市街地の大規模な盛土など、数年を要すると思われます。

(2011/10/03 西田→倉田市長)

こんばんは。西田です。

今日、三上消防長から連絡があり、釜石・大槌へ向けて防火服と学校用家具を発送して頂いたそうです！ ありがとうございます。

(2011/10/04 西田→倉田市長)

おつかれさまです。西田です。

今日、無事に釜石消防と大槌の学校へ支援品が届きました。ありがとうございます。

特に釜石消防の皆さんは、本当に心から感謝されていました。

何もしていない僕に対して（僕を通じて消防の皆さんに？）感謝されるのですが、なんか、箕面市の消防の皆さんに申し訳ないです…

ダッシュで大槌へ戻り、学校へ支援物資を降ろした後、すぐに三上消防長に電話しておきました！

支援したい気持ちはあっても、なかなかここまでは出来ないと思います。

本当に消防の皆さんには、頭が下がります。m(_ _)m

ちなみに、釜石の消防には新車の消防車がズラッと並んでましたが、大阪市からの支援物資も何台かあるそうです。相手は政令市ですが、ケタが違いますね…

しかし、「気持ちでは箕面も負けてへんわ！！」と、変な対抗心を燃やしてきました。

糸川さん無事に帰還したみたいですね。

すっかり宮古市の生活に馴染んでしまい、大阪に戻って元の生活に馴染めるのか心配してたみたいですが…

支援品の受け渡しの様子などは、例によって政策推進課から、「もうわかっているかもしれないけど、ブログ書いてくれる？」と、有り難くご指示賜りましたので（笑）ブログにてお伝えします。

（2011/10/04 西田→政策推進課）

※後任者の検討のため、現在の業務についての問い合わせに対する返信

おつかれさまです。大槌町教育委員会事務局の西田です。

お問合せの件については、次のとおりです。

> 1. 仮設学校の建築が終わった今、西田さんの担当業務を教えてください。

①復興計画の策定

大槌町も小中一貫校の建設を目指しており、復興計画の素案に示された学園エリアに一貫校の計画を策定していきます。

復興計画（都市マスみたいな感じです。）は、町長の指示により年内を目処に策定することとなっていますので、10～12月という短期間での計画づくりとなります。

具体的には、建築CADによる学校施設のイメージ図の作成。これらの根拠となる資料の作成です。

町長からも住宅系、学校施設の計画策定を最優先にとの指示がでており、相当急がれています。

今朝、書きかけの図面でしたが、副町長へ報告するために、教育長が持って行かれました…

どんどん指示が飛んできます。

②文部科学省への被害状況の報告

被災した学校に関する状況の報告書作りです。被災した学校の写真撮影や説明図の作成です。

通常文部科学省へは、「学校施設台帳」という指定の図面に必要事項を記載して報告しますが、この学校施設台帳の原本を紛失しており、コピーしか残っていませんので、コピーをもとに建築CADによって電子データを復元していま

す。

③学校施設の維持管理業務全般

これは、箕面市の学校管理課と同じ業務です。主に施設の修繕や、改修計画の相談にのっています。仮設校舎の維持管理もここに含まれます。

④その他

支援物資の申し出や、マスコミからの問い合わせが相変わらず大量にあるため、結構これに時間をとられます。

> 2. 10月末で交代となりますが、次の人はどのような業務を担当することになるのでしょうか？

例えば西田さんの今やっている業務を引き継いで担当する。あるいは新たな業務を担当する。

基本的には上記の①～④の業務を引き続き行っていただきます。

①復興計画の策定

私がどこまで進めて帰れるがわかりませんが、今後ともメインになる仕事です。いずれは、計画に基づき基本設計を外注していく流れになると思います。

②文部科学省への被害状況の報告

報告が完了すればこの業務は無くなりますが、これに基づき被災した施設の解体や改造といった業務が発生します。特に復興計画の支障となる施設は早期に解体を求められる可能性があります。

③学校施設の維持管理業務全般

④その他

これらの業務は引き続き継続されます。

※いずれの業務も学校施設管理の経験者、学校施設建設の経験者（特に小中一

貫校が望ましい。) でなければ、厳しい話ですが足手まといになり「お客さん」になりかねません。

ブログの方は小山課長あて、送付しておきますのでお手数をおかけしますがよろしくお願ひします。

(2011/10/17 西田→まちづくり政策課)

おはようございます。大槌町の西田です。
ご無沙汰していましたが、近況報告です。

1. 現在の担当業務について

仮設校舎の竣工後は次の様な業務を行っています。

①仮設校舎関連

- ・備品類の購入
- ・機械警備装置の設置
- ・仮設校舎への支援物資受入
- ・書類の整理などその他雑務

※これらの業務はほぼ完了しています。

②学童保育施設の建設

- ・セーブ・ザ・チルドレンの全面支援により、学校と同一敷地内に学童保育施設の建設が決まりました。

建設自体は福祉課の業務ですが、取合いの調整などを行っています。

10月31日に竣工予定です。

③文部科学省への被災状況の報告

- ・文部科学省への報告が遅れている、被災状況の報告業務を手伝っています。
主に報告書に添付する図面類の作成です。

④復興計画の策定に伴う、小中一貫校建設計画の策定

- ・現在のところ復興計画(案)において学校建設地が明確になっていないので、複数の建設候補地に学校施設計画(案)を作図している状況です。復興計画の進捗に伴い、今後具体化していく必要があります。

…と、いった内容です。

大槌町では建築技術職員が不足しているようで、上記のいずれの業務も、かなり滞っています。私の赴任期間中には完結しない業務ばかりで、特に小中一貫校の建設については、今後さらに業務量が増えていきますので、引き続き職員の派遣が必要であると思います。

2. 大槌町の状況について

①役場の動き

10月11日の課長会議（経営会議のようなもの？）で、3名の副町長が就任されたことについて報告がありました。

大槌出身の方が1名、国交省から1名、岩手県から1名とのことです。

3名の副町長がそれぞれ「調整」、「復興」、「産業振興」の役割を分担されるということです。

また、併せて機構改革が近々予定されているようです。

これまで大槌町には「部」が存在しませんでした。新たに設置されるようです。

②町内の状況

町内の様子ですが、大きな動きは無く相変わらず少しずつ被災した建物の解体や瓦礫の処分が進められています。

大潮の度に冠水しているゼロメートル地帯の道路については、10月末の大潮に向けて、急ピッチで嵩上げ工事が進められています。

町内でスーパーの復旧工事が1件始まりました。いつ営業を再開するのか不

明ですが、これが完成すれば利便性が一気に向上しそうです。

3. 派遣期間終了に伴う引継ぎ及び帰任について

10月末の帰任及び引き継ぎの関係ですが、今のところ次のようになっています。

10月29日（土）私の後任で、建築住宅課の平山くんが赴任

10月30日（日）遠野市の宿舎から釜石市の仮設住宅へ引越し作業

※冬季は積雪のため遠野市からの通勤が不可能になるため、
11月から宿舎は釜石市に変更になります。

10月31日（月）終日業務引継ぎ

11月 1日（火）花巻発15：55分の飛行機で帰阪

11月 2日（水）箕面市役所へ出勤

の予定です。

(2011/10/17 西田→平山)

※後任者の支度のための情報

仮設住宅にある物、職場にある物を思いつく限りリストアップします…

仮設住宅

※細かい物から…

①風呂

風呂桶、いす、シャンプー、リンス、せっけん

②トイレ

トイレットペーパー、そうじ道具一式

③台所

なべ大、なべ小、やかん、フライパン大、フライパン小、おたま×2、フラ

イ返し、皮むき、包丁、ざる、ボール、食器がいっぱい、はし、スプーン、フォーク、レトルト食品、ビールなどの残り、前任者がおいていった謎の調味料がいっぱい…、ビニール袋、ラップ、アルミホイル、ジップロック、タッパ、その他…

④居間

テーブルタッパ、座椅子、座卓大、座卓小、敷きふとん、マット、掛けふとん、毛布、まくら（シーツ、ふとんカバーはこっちで買って下さい。）、ティッシュペーパー、ごみ箱

⑤その他

洗濯洗剤（もうすぐなくなる…）、洗濯ロープ、洗濯バサミ、ハンガー10本くらい、なぜかスーパーのカゴ、芳香剤とか…、カレンダー、マスクがいっぱい

今住んでる遠野の宿舎は、和泉市→枚方市→箕面市、と3代引き継いでいるため、前任者が残していった細かい物がいっぱいあります。結構なんでもあるので何とかあります。足りなければ釜石に買いに行けばよし！

家電類は遠野の宿舎にあるものですが…

テレビ、掃除機、電話（使ってない!）、洗濯機、冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、扇風機、読書灯、目覚まし時計、ドライヤーです。

ガスコンロ、エアコンは仮設住宅についてました。コタツ買ってくれるらしいです。

職場にあるもの

机、事務用品1式、PC、高速ネット環境、建築申請メモ、消防メモ、（古いけど）建設物価、コスト情報、建築工事共通仕様書

逆に持ってくる物は…

ヘルメット、作業着（青いやつ（笑））、カップ、事務用品は1式ありますが念のため持ってくること！（特に電卓）、建基法、今までの仕事で蓄積したデータ類、名刺、防寒具、寒中電灯（仮設住宅の外が真っ暗なので必須！）

荷物は大量になると思うので、できるだけ宅急便とかで送って下さい。

クロネコヤマトの営業所止めにするなら、29日でも30日でもクルマで取りに行きます。釜石の営業所でいいと思います。

ちなみに私が持ってこなくて困った物は、

通勤用のカバン（←こっちで買った）、灰皿（いらんか…）、箕面市の皆さんのメールアドレス（←これ結構大事。必要な連絡先は予め調べてきて下さい。）

これから、どんどん寒くなると思うので、冬の服はできるだけ持ってきた方がいいと思います。

追伸

こちらへ派遣期間中は大槌の仕事に専念して下さい。箕面での仕事はしっかりと引継ぎ書を作って、退職するつもりで完全に引継ぐようにした方がいいです。

| |
|------------------------------|
| 派遣報告書 |
| みどりまちづくり部 平山 福太郎 (任務：学校営繕支援) |

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成23年11月1日～平成24年1月31日

1. 業務の状況

(大槌町の体制)

昨年8月29日に就任された碓川町長を中心として、佐々木副町長（調整担当）、高橋副町長（産業振興担当）、石津副町長（復興担当）の副町長3名体制で大槌町の復興に向けた業務が進められていた。庁内では復興局が復興業務の中核を担っており、有識者、地域住民等からなる地域復興協議会の意見を踏まえ、コンサルタント会社、UR都市機構等の協力を得ながら、復興の道筋を示す復興計画基本計画等の策定作業が行われていた。

私が配属された教育委員会事務局学務課は、教育長、教育次長を含めて15名体制であり、そのうち派遣職員は私のほかに岩手県及び岩手県軽米町の方など3名が業務に従事していた。

学務課の業務内容は、教育政策、学校の管理運営、就学支援等に係る通常業務のほかに、被災児童等の援助、全国から寄せられる支援物資の対応等を行っていた。また、仮設校舎の維持管理、仮設校舎に替わる新しい校舎の建設計画が急がれていた。

(業務の状況)

赴任後は、文部科学省の災害復旧事業を活用して建設された仮設校舎について、国庫補助金の交付申請等に係る業務を担うことになった。初めて経験することが多く不慣れな部分も多々あったが、岩手県及び文部科学省の方々から様々な助言等を頂くことで何とか業務を進めることができた。

子供たちの学習環境は、仮設校舎の完成によって震災直後と比べて格段に改善されたが、いつまでも仮設というわけにもいかず、次のステップである

本設校舎の移転建設を早期に実現するため、移転建設候補地の選定、調査を進めながら、その財源となる災害復旧事業について文部科学省と意見交換等を重ねた。

私が派遣期間を通じて携わった業務は、復興計画基本計画・実施計画の策定、復興交付金の交付申請を行うための復興交付金事業計画の策定等に関連する業務が中心であり、技術職として派遣された立場としては、目に見える形の復興事業を進められないことに内心忸怩たる思いはあったが、復興の一助になれるよう全力を尽くした。

2. 被災状況

大槌町は岩手県の沿岸南部に位置しており、水産業を中心とした街づくりが行われていたが、東北地方太平洋沖地震により発生した大津波により中心市街地は壊滅的な被害を受け、町役場、消防庁舎、学校などの防災拠点となる公共施設も使用できない状態となって連絡通信手段が途絶したため、支援が得られず孤立してしまった。

沿岸地域は、過去の津波被害を教訓として防波堤、水門といった強固な構造物により守られていたが、大津波はこれらを乗り越え、想像を絶する力で破壊して市街地を飲み込んでしまった。震災以降のテレビ報道などで現地状況を知ったつもりになっていたが、被災地を実際に目の当たりにして現実と思えない光景に言葉では言い表せない恐怖を感じた。



(写真①) 城山体育館から見た大槌町の市街地。
未だに被災建物が解体されず残っている。



(写真②) 小槌川にある水門（奥側）。津波は水門を乗り越え小槌川を遡上し、市街地を襲った。

震災による犠牲者と行方不明者は合わせて千人を超えており、未だに約五百名の方が行方不明の状況にある。震災前の大槌町の人口は約一万五千人であり、如何に甚大な被害であったのかが窺い知れる。現在も海上保安庁、警視庁等による捜索が続けられているが、行方不明の方々が一日でも早く家族のもとへ戻られることを祈願する。

| 区 分 | | 人 数 |
|-------------|----------------|-------|
| ① 死亡者 | | 802 人 |
| 身元の確認状況 | 身元が確認された遺体数 | 742 人 |
| | 身元が確認されていない遺体数 | 60 人 |
| ② 行方不明者数 | | 479 人 |
| うち、死亡届の受理件数 | | 446 人 |

(表①)東日本大震災人的被災状況(大槌町HPより抜粋)



(写真③)大槌川の河口(奥側)。大槌川を遡上した津波は堤防を越えて市街地(右側)を襲った。



(写真④)吉里吉里地区の海岸。防波堤は各所で破壊され、引き波により海側になぎ倒されている。

3. 復旧の状況

(道路の状況)

主要な幹線道路、生活道路は復旧工事が進んでおり、通行に支障がない程度まで回復したが、街灯、ガードレールは津波により流されたままのため、日が暮れると役場周辺も真っ暗になり、そこに市街地が存在したことが想像できない状況である。

また、仮設校舎への通学手段としてスクールバスを運行しているが、徒歩、自転車通学の児童・生徒も多数おり、安全確保のため通学路の復旧が課題となっている。

(商業施設の状況)

大槌町内ではコンビニのローソンがいち早く復旧したが、生活用品を買うことができる数少ない施設のため、日夜を問わず混雑している状況であった。



(写真⑤)大槌北小学校のグラウンドにオープンした仮設商店街。スーパー、理髪店などが入っている。



(写真⑥)大型商業施設。震災津波により甚大な被害を受けたが昨年12月下旬に復興した。

昨年12月以降、大槌北小学校のグラウンドにプレハブの仮設商店街がオープンし、さらに震災津波により被災した大型商業施設が周辺住民の強い要望を受けてリニューアルオープンするなど沿岸部の商業施設の復旧が進み、復興に向けた足掛かりが少しずつ進んできたと感じた。

(震災廃棄物の状況)

最近の報道で最も多く取り上げられている震災廃棄物の処理方法について、静岡県島田市が大槌町及び山田町の震災廃棄物を受け入れると表明されたが、全国各地で住民の反発もあって難航していると報道されている。

大槌町の震災廃棄物は放射能の影響を受けていないが、原発事故による風評被害もあり処理が思うように進んでいない。



(写真⑦)処理されていない震災廃棄物の山。町内に幾つもこのような光景が見られる。



(写真⑧)大槌中学校のグラウンド。津波により破損、焼損した車両が数多く残されている。

今後も被災建物の解体撤去が行われるため、震災廃棄物はさらに増加するが、町内の仮置き場に余裕はほとんどなく行き場がない状況にある。

復興事業を加速させるためには、震災廃棄物の処分先の確保が不可欠である。

被災3県に処分先を確保するべきとの意見もあるが、被災自治体は復興を進めるためのマンパワーも不足しており、依然として厳しい状況にある。

全国の自治体の協力により処分先が決定し、一日も早く被災地から廃棄物が無くなることを期待してやまない。



(写真⑨) 大槌中学校。災害廃棄物処理事業により今年度内に解体される予定。

4. 復興の状況

(復興計画の状況)

大槌町では町民の意向を取り入れた復興計画とするため、地域復興協議会等において地域ごとに復興ビジョンを検討し、これらの意見を集約して「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」が策定され、昨年12月末に町議会において承認された。

さらに今年度内に復興計画実施計画を策定するよう町長方針が示されたことから、教育委員会事務局においても、教育、学校等に関連する全ての事業を抽出し、当計画の策定を進めるとともに、復興交付金の活用を含めた財源の確保に努めた。

大槌町の復興計画期間は、平成30年度までの8年間となっているが、10年で計画している被災自治体もある。いずれにしても復興が完了するまでに事業が長期間に亘ることから、事業を継続させるための財源が必要不可欠となる。



(表②) 大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画【概要版】(大槌町HPより抜粋)

(復興交付金)

大槌町を含む沿岸部の被災自治体は、主要な市街地の大半が甚大な被害を受けたことから、復興が完了するまでは大幅な税収減が見込まれており、経常経費の大幅な削減、圧縮が進められている。

復興事業を進める上で必要な財源には復興交付金等が充てられるが、現在のところ復興交付金が交付される計画期間は平成27年度までとされているため、以降の財源確保に不安が残っている。

復興交付金は、インフラの整備、住宅の集団高台移転、災害公営住宅の建設、学校の移転建設などの復興の基幹事業を進める財源となるため、教育委員会事務局においても学校移転建設事業、避難所整備、学習環境の改善など各種事業での活用を検討した。

その結果、今年1月末に岩手県の被災自治体と合同で復興交付金事業計画の第一回申請を行うことができたが、復興庁（先月までは東日本大震災復興対策本部）は、事業の必要性、確実性などを検証した具体的な事業計画の提出を求めているため、申請できた復興事業は当初予定から随分と下方修正せざるを得なかった。先日、第一回申請分の交付決定がされたと報道されたが、全ての復興事業が交付決定されるまでには相当な期間を要すると考えられる。

基幹事業における対象事業（5省40事業）

※本リストは3次補正予算における対象事業であり、復興期間全体を通じた場合には、内容が変更となる可能性がある。

| 番号 | 事業名 | 番号 | 事業名 |
|--------------|---|----|--|
| 文部科学省 | | | |
| 1 | 公立学校施設整備費高率負担事業(公立小中学校等の新增築・統合) | 18 | 道路事業(高台移転等に伴う道路整備(区画整理)) |
| 2 | 学校施設環境改善事業(公立学校の耐震化等) | 19 | 道路事業(道路の防災・震災対策等) |
| 3 | 幼稚園等の複合化・多機能化推進事業 | 20 | 災害公営住宅整備事業 (災害公営住宅整備事業、災害公営住宅用地取得造成費等補助事業等) |
| 4 | 歴史文化財発掘調査事業 | 21 | 災害公営住宅家賃低減化事業 |
| 厚生労働省 | | | |
| 5 | 医療施設耐震化事業 | 22 | 東日本大震災特別家賃低減事業【新規】 |
| 6 | 介護施設復興まちづくり整備事業【新規】 (「定額返還・随時対応サービス」や「訪問看護ステーション」の整備等) | 23 | 公営住宅等ストック総合改善事業(耐震改修、エレベーター改修) |
| 7 | 保育園等の複合化・多機能化推進事業 | 24 | 住宅地区改良事業(不良住宅除去、改良住宅の建設等) |
| 農林水産省 | | | |
| 8 | 農山漁村地域復興基盤総合整備事業 (農産物生産の基盤整備、農地等の生産基盤整備等) | 25 | 小規模住宅地区改良事業(不良住宅除去、小規模改良住宅の建設等) |
| 9 | 農山漁村活性化プロジェクト支援(復興対策)事業 (被災した生産施設、生産環境施設、地域間交流拠点整備等) | 26 | 住宅市街地総合整備事業(住宅市街地の再生・育滅) |
| 10 | 震災対策・戦時作物生産基盤整備事業 (米・大豆等の生産に必要な水利施設整備等) | 27 | 優良建築物等整備事業(市街地住宅の供給、住居の再開発等) |
| 11 | 被災地域農業復興総合支援事業(農業用施設整備等) | 28 | 住宅・建築物安全ストック形成事業(住宅・建築物耐震改修事業) |
| 12 | 漁業漁産物加工施設強化事業(漁業漁産物加工施設整備等) | 29 | 住宅・建築物安全ストック形成事業(ガレage対策等危険住宅移転事業) |
| 13 | 漁港施設機能強化事業(漁港施設用地買上げ、排水対策等) | 30 | 造成空地滑動崩落緊急対策事業【新規】 |
| 14 | 水産業共同利用施設整備事業 (水産業共同利用施設、漁港施設、地流用種苗生産施設整備等) | 31 | 津波復興拠点整備事業【新規】 |
| 15 | 農林水産関係訓練伊災機関係急整備事業 | 32 | 市街地再開発事業 |
| 16 | 木質バイオマス施設等緊急整備事業 | 33 | 都市再生区画整理事業(被災市街地復興土地地区画整理事業等) |
| 国土交通省 | | | |
| | | 34 | 都市再生区画整理事業(市街地活性化対策事業) |
| | | 35 | 都市防災推進事業(市街地防災対策事業) |
| | | 36 | 都市防災総合推進事業(津波シミュレーション等の計画策定等) |
| | | 37 | 下水道事業 |
| | | 38 | 都市公園事業 |
| | | 39 | 防災集団移転促進事業 |
| | | 40 | 低炭素社会対応型浄化槽集中導入事業 |

(表③) 東日本大震災復興特別区域法資料 (復興庁HPより抜粋)

5. 学校の状況

大槌町では4つの小学校と1つの中学校が震災津波により使用できない状況になったため、被災した5校の合同仮設校舎を建設して授業を再開している。

校舎は仮設であっても教育は仮であってはならないという教育長の強い意志とリーダーシップの下に教師、職員が一丸となって復興に取り組んでいる。

(学校の様子)

学校の子供たちへの支援は、今なお全国各地から日々様々な形で届けられている。昨年11月には被災した4つの小学校が合同でロードレース大会を開催し、民間企業がその様子を写真撮影して写真やアルバムを児童にプレゼントするなどの支援活動も行われた。



(写真⑩) 合同レース大会の様子。児童はお互いを応援しながら最後まで頑張って走り切った。

今年1月末に被災した4つの小学校と1つの中学校の児童生徒作品展が開催された。暗い作品が展示されているのではないかと不安を払拭する非常に明るく前向きな作品が数多く展示されていた。大槌町の将来を担う人材を育成するためにも、新しい学校の建設が急がなければならないと強く感じた。



(写真⑪) 城山公園体育館で行われた児童生徒作品展の様子。児童生徒の作品の他に全国からの応援メッセージなども展示された。

(仮設校舎の状況)

岩手県の沿岸部は内陸部と比較して積雪も少なく気温も高めと言われているが、今年は寒波の到来により最低気温が氷点下10度まで下がる日が続いたため、仮設校舎では給水系統が凍結するなど大阪では考えられないような

トラブルが発生し、その対応に迫られた。

同様の凍結事故は沿岸被災地の仮設住宅でも続いたため、水道業者はその対応に迫われて復旧が追い付かないとの報道もあった。いずれもプレハブの仮設建物であるため設備等で脆弱な部分があることは否めないが、復興が進むまで長期間使用することが見込まれるため、今後は利用者の要望にいち早く応えて、より良い環境に改善していくことが求められている。

(学校の移転建設)

復興計画基本計画において、被災した4つの小学校と1つの中学校の学区を再編して小中一貫教育校として移転建設する方針が示され、すでに高台に立地している大槌高等学校を含めて文教ゾーンとして位置付けられた。

このエリアでは、震災前より都市計画道路の整備事業が進められていたため、事業主である国土交通省三陸国道事務所と調整しながら学校の建設予定地の選定作業を進めていた。移転候補地のほとんどは私有地であり、地権者、地元住民の合意を得ながら事業を進めていくことになるため長期的な事業となるが、仮設校舎に入学した児童が仮設校舎で卒業することがないよう、また、復興交付金事業計画が平成27年度までしか認められていないなどの状況も踏まえて、復興事業の前倒しを図るべく津波復興拠点整備事業の活用など手法について検討、議論を重ねた。

また、大槌町内では震災前より少子化が進んでいたため、学校の統廃合は大きな課題となっているが、震災後は沿岸部での雇用が失われたこともあって、町民・児童生徒数が急激に減少した。このような状況から被災した学校をそれぞれ再建するのではなく、小中一貫教育を導入し、学区を再編して小中一貫教育校を移転建設する方向で検討を進め、昨年12月から今年1月にかけて小中一貫教育の導入に向けた地域保護者説明会を複数回開催し、一定の理解を得るに至った。

来年度以降は、平成25年度の小中一貫教育の円滑な導入・実施に向けた準備委員会の設置等が予定されている。

6. 派遣職員の住環境

(宿泊施設)

大槌町内は市街地が甚大な被害を受けたため、外部から支援に来るボランティア、建設業者等が宿泊利用できる施設が皆無であり、近隣の釜石市、遠野市等のホテル等を利用している。

震災津波により被災した釜石市内のホテルも昨年12月以降順次本格オープンしており、街に少しずつ活気が戻りつつあるように感じた。

(通勤環境)

私は、釜石市栗林町の仮設住宅に入居して業務に従事したが、副町長や岩手県庁からの派遣職員も周辺の仮設住宅に数多く入居されている。

釜石市栗林町から大槌町役場までは距離で10km、車で20分程度の距離のため、前任の派遣職員が住んでいた遠野市からの通勤と比較すると通勤に伴うストレスは大幅に軽減され、より業務に専念できる環境になっていると感じた。

昨年12月以降は積雪により度々路面が凍結するなど、運転に注意を要することもあった。特に沿岸被災地では前述したとおり道路の街灯、ガードレールが復旧していない箇所が多数存在しており、仮設住宅は道路が整備されていない高台に立地している場所が多いため、町民から路面の凍結による事故を心配する声が多く寄せられていた。

(生活環境)

大槌町内の大型商業施設が復興したことで、生活に必要な物資が手に入るようになり生活環境は随分改善した。

また、この大型商業施設は通勤経路上に位置しているため、買い物のために長距離移動する必要がなくなり、派遣職員の負担が軽減された。

7. 派遣業務の総括

震災発生から7カ月を経過していたことから、一定の復旧・復興が進んでいるものと考えていた。しかし、被災建物は被災後の姿そのままに存在され、道路は大潮により冠水しているなど依然として厳しい状況であった。住民が震災以前の生活を取り戻すまでの復興の道筋をイメージできないほど震災津

波による被害は甚大であった。

着任後、東北・大槌町を復旧・復興すべく強い意志を持って町民のために献身的な働きをされる職員の方々を見て、大槌町を必ず復興させるという確固たる意志と目標を共有・共感し、業務に従事することを決意した。

今後の復興に向けての課題は、復興を担う人材確保である。大槌町では震災津波により幹部クラスの職員が多数犠牲になったため、部長クラスに岩手県からの派遣職員の方々を据えているが、岩手県も人的余裕がないため今年3月末にも派遣職員を引き上げるとの話もある。

昨年末に各部局から来年度の人員体制について増員要望が出されたが、復興事業が非常に大規模であり、また、実施が確定していない事業も多いことから、どれだけの人員体制が必要となるか掴めていないという状況にある。

復興事業が本格化する来年度以降は、大槌町の職員の負担もより一層増大することが予想され、復興事業を加速させながら復興計画に掲げる目標を実現していくためには、今後も被災自治体との情報共有を図りながら現地の要望に応じて迅速に職員派遣を行うなど全国の自治体から継続した支援が必要であると強く感じた。

箕面市においても、近い将来に発生が予想されている東海・東南海・南海地震等に備えて、各自治体や専門知識を有する各種団体との水平連携の構築・強化を図ることも重要であると考えます。

今回の震災では、災害時に安全と考えられていた防災センター、学校などの避難施設でも震災津波によって人的・物的被害が生じた。市民の生命を守るための拠点となる公共施設の防災機能の強化、改善に努めていく。

職員手記

みどりまちづくり部 平山 福太郎 (任務：学校営繕支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 1 月 31 日

今後の防災行政の発展の一助となるよう、今回の派遣業務を通じて私を感じたことを記述します。なお、あくまでも私見ですので、その点を踏まえてご活用ください。

1. 職員の状況

大槌町は県内で最も被害が大きかった地域です。職員の多くは町内に住まわれていたようで、自らも被災しながら町民のために不眠不休で復旧作業に従事されたようです。

1月30日に職員の方が事故により命を失う痛ましい出来事がありました。原因は分かりませんが、精神的に厳しい状況に置かれていたとの話も聞きました。他にも精神的に苦しい状況に置かれている方は多数おられると思います。

防災対策としてハード面の強化は勿論ですが、大規模災害からの復旧・復興は長期間を要することから、職員のメンタル的なサポートを継続的に行うことが必要になると思います。これは被災自治体だけで解決できる問題ではありませんので、自治体間の防災・支援協定等により相互支援体制の構築等が必要かと思えます。

2. 発災後の状況

(物資)

大槌町は災害発生の翌日に自衛隊が到着し、食糧等も3日で届くようになったので、災害の際は3日持ち応えることができれば助かると言われていました。

停電等により通信手段が途絶した大槌町では、やはり衛星電話が効果を発揮したようです。台数は足りなかったものの、自衛隊等から衛星電話が持ち

込まれたようです。

(犠牲者等)

今回の震災では多数の方が犠牲になりましたが、ご遺体を包むための布団、毛布等が全く足りなかったようです。災害備蓄倉庫に飲料水等を保管することは勿論ですが、経験からブルーシートなども保管しておくべきだという意見がありました。

震災後、最も早く復旧したのは、お寺、花屋、墓石屋という話もありますが、火葬場が足りず、ご遺体の保管場所、ドライアイス等の不足も深刻だったようです。釜石市では土葬も検討され、最終的に他府県で火葬されるなど相当対応に苦慮されたようです。(これは本に書いてありました。)

将来において予想される最大規模の災害に備えるという視点に立てば、こういった事態も視野に入れた備えが求められると思います。

3. 大槌町の状況

正直、街づくりの観点から云うと復興はほとんど進んでいません。復旧事業は行われていますが、復興計画が決まっていないため、事業自体を進められません。これは沿岸被災地共通の課題のようです。

また、復興交付金がもらえないと、事業を進めるための財源もありません。復興交付金の交付が決まっても、これを事業化していくマンパワーも足りません。岩手県を通じて大槌町に配付される義援金も30億円程度だそうで、復興事業を行うには全く足りません。

しかし、報道でも云われているように、廃棄物だけは一向に減らず、どんどん増えていっている状況であり、今後、夏場に向けて気温が上昇してくると昨年同様に環境の悪化等が懸念されています。

沿岸被災地では、相当なスペースを廃棄物保管用地として使用しており、これらの処分が進まない限りは復旧・復興が進められない状況です。なお、廃棄物保管用地として民有地も使用しているようです。

4. 今後の防災対策

最近大きく取り上げられている地震として、東海・東南海・南海地震と首都直下型地震がありますが、いずれも大きな被害が予想されています。将来予想される大規模地震に備えるためにも、東北地方をいち早く復興させるこ

とが防災対策としても重要ではないかと思えます。

5. 現在の心境等

震災から間もなく2年となりますが、報道においても東日本大震災の被災地を取り上げる番組が激減したように感じます。

被災地の復興状況が気になるので日々ニュース、報道番組等はチェックしていますが、NHK以外ではほとんど目にしません。

被災地の復興が目に見える形になるまで相当の時間を要すると思われませんが、常に自分の関心事として考えていこうと思っています。

6. 当時の心境等

派遣の打診があった際、本当に自分でよいのかという心配、不安しかありませんでしたし、被災地へ派遣されている期間中は本当に大槌町の役に立っているのか、と日々不安に感じ過ごしていました。

今まで自分が行ったことのない業務ばかりでしたし、目に見えた成果が出ないということもありましたので心苦しい毎日でした。

途中から割り切って、大槌町の職員の負担が少しでも軽くなるように最善を尽くそうと気持ちを切り替えたことで、張り詰めた気持ちに少し余裕を持つことができ、派遣期間を無事過ごせたように思います。

派遣職員の皆さんは全力で復興業務に従事されていますので、長期間の派遣により体調を崩されることがないように、本人、家族のために必要なサポートをお願いします。

(両面印刷用調整白紙)